

賢は押し潰されそうな感情の嵐の中で目覚めた。自分の中に悲しみが充満しているのを感じる。祐子と連絡を取る手段は絶たれたままだ。唯ひとつの望みは、何時も祐子が傍に居ると感じていることだった。それは、まだ祐子の意識がこの時空間にあることを物語っていた。賢はホテルで朝食を済ますと直ぐに警察署に向かった。長崎県警は佐世保港に停泊中の外国国籍の船舶の調査に躍起になっていた。誘拐組織を一網打尽にできる可能性の一番高いところに焦点を絞っているようだった。勿論既に出航した船舶に対しても海上保安庁を通じて、船内の調査を依頼しているとのことだった。現在までのところ、誘拐犯の乗船している船舶は発見されていないとのことだった。県警は当然密航の線も追っていた。しかし密航船を発見するのは難しく、それらしき情報もキャッチできていなかった。祐子の足跡は依然として不明のままだった。県警は警視庁と相談して、ICPO（国際手配事務局）に祐子の黄手配書（国際行方不明者手配書）を出すことに決定していた。賢は祐子のもと思われるビジネスバッグの確認を依頼された。確かに祐子のものであった。ビジネスバッグに触れると、祐子のイメージが眼前に展開するようだった。祐子は何時もの朗らかなイメージを見せていた。賢は、心の中で「きっと助けに行くから、待っている」と祐子のイメージに呼び掛けた。県警を出ると、直ぐにハイパートレード社に向かった。ハイパートレード社には既に5、6人の警察官が入っていて、社長室や業務部を立ち入り調査していた。社長秘書の踏世（ふみよ）の所在も掴んでいた。社長から功勞との名目で、海外旅行をするように示唆されたとのことだった。警察の捜査官は、「はじめから計画的な犯行だったようだ」と言った。小山田の行方は依然として不明だった。偽装か盗品のパスポートを使って海外逃亡を図った可能性もあると言った。外の組織を使ったインサイダー取引で、かなりの資金を手に入れているはずだと言う。賢はこんな欠陥だらけの経済システムを作った人間の愚かさを思い、悲しくなった。しかし、今は何としてでも祐子の所在を確認しなければならない。それに「急がなくては、祐子が何処かの国の危険な組織に売り飛ばされてしまうかも知れない。そうなったらもう、そう簡単に救出することはできない」

そのような、悲観的な気持ちが湧き上がるのを見つめながら、賢は、その考えを捨てて、「祐子が持ち前のエネルギーな愛で、窮地を切り抜けることができるだろう」という方の気持ちを採用した。賢は、ここに居て、何もできないでいることに焦りを感じてきた。自分の強健な肉体は、こういう時の為に与えられているはずだと思った。しかし、行動に移れるようなインスピレーションは湧いてこない。賢はその場で暫らく瞑想をした。ある考えが閃いた。それは漁船だった。漁船を使って誘拐した女性たちを運んでいる船のイメージが湧き上がってきた。賢は田辺に電話を掛けた。

「リーダー、今電話しようと思っていました。亜希子さんが、漁船のような、中型の船舶を、それも佐世保港じゃなくて、その周辺の漁港なんかを使ったんじゃないかって言うんです。わたくしもそんな気がしてきたのです。誘拐犯が、佐世保港に入港しているような大型の船舶を使って藤代さんたちを運んでいるとは、どうしても考えられません」

「田辺さん、僕も今、そのことに気が附いたんだ」

「リーダーわたくしが、社長の奥様と相談してヘリコプターをチャーターしました。わたくしと亜希子さんが乗ってそちらに行きます。高速ヘリですから、30分足らずでそちらに着きます。佐世保の国道498号線沿いにある労災病院の屋上に一時着陸の許可を得ました。今すぐに出ますから、リーダーはそこで待機しててください」

賢はそこにいる警察官にそのことを告げて、急いでハイパートレード社を出た。タクシーを拾って直ぐに労災病院に向かった。病院は緊急の依頼を受けていると言って、受付の女性が直接賢を屋上に案内してくれた。屋上に出ると、10分ほどして、ヘリコプターが接近して来るのが分かった。すごい爆音を発している。ヘリコプターが着陸すると、賢は駆けて行って飛び乗った。流石に高速ヘリコプターは速かった。一気に佐世保港の上空に飛び上がった。中には亜希子と田辺が居た。

「リーダー、何処を探しましょうか？」

賢が乗り込んで、腰を降ろすや否や田辺が聞いた。賢は安全ベルトを掛けながら応えた。

「二人ともありがとう。こんなにスピーディに事を運んでくれて。まず、佐世保港の周辺を調べて、外洋に出てもらおうか」

ヘリコプターの副操縦士が言った。

「緊急救護飛行の申請をしましたが、佐世保港は軍の規制があつて直接接近できませんから、すこし離れた所からになりますがいいですか？」

「ええ、できるだけ船舶の動きが確認できる場所を飛行してください」

「分かりました」

ヘリコプターは佐世保港を斜め上空から見の形で飛行した。船舶の様子が手に取るように分る。そこに停泊しているのは大型の船舶ばかりで、田辺が言ったような中、小型の漁船の姿は見当たらなかった。佐世保港の周辺を3周回った後、ヘリコプターは佐世保港の西側の九十九島の海岸線を飛んだ。遊覧船やフェリーが航行している。しかし、中型の漁船は見つからなかった。ヘリコプターはそのまま南下した。米軍基地の近くに佐世保漁港がある。操縦士は米軍基地を飛ぶのを躊躇したが、3人が「ぜひとも頼む」と懇願した為、1回だけとの条件で漁港の上空を低空飛行してくれた。賢が言った

「ここだ。ここから出たんだ」

それは直感だった。亜希子が言った。

「わたくしも、ここに悲しみに打ちひしがれた、祐子お姉さまの心のゆらめきを感じます」

しかし、そこには小型の漁船が7艘ばかり停泊しているだけだった。警察が言うように23人も女性を隠しておけるような大きさの船の姿は無かった。賢が副操縦士に向かって言った。

「昨日の夕方出航した普通の漁船に、追いつくことはできますか？」

「漁船はどんなに速くても、精々時速50キロ、こちらは500キロまで出せますから、方向さえわかれば、2時間もあれば追いつけると思います。ただ、どこに向かっているかが分からないことには、探しようもありませんね」

亜希子が言った。

「わたくしは祐子お姉さまが時々、見えるような気がします。意識を上

空に上げてみると祐子お姉さまを乗せた船は、南に向かっているように見えます」

賢は副操縦士に船舶を確認しながら、真南に向かって、飛行するように頼んだ。副操縦士は一度、途中で給油しないと無理だと言った。精々往復で5時間が限度とのことだった。漁船が南下しているとする、既に沖縄近辺まで行っているはずである。賢は給油を了解した。副操縦士は沖縄の那覇で給油すると言った。しかし、「あそこは巨大な米軍基地があるから、あまり接近したくないですね」と言った。そこからは亜希子が頼りだった。亜希子は意識を祐子に集中した。自分の体がヘリコプターに括り付けられているので安心して、透視を試みることができた。亜希子は再び船が南下しているところを捕らえていた。それがどのあたりかは皆目見当も付かない。飛行しながら船舶の上空を通り越す度に、意識をその船舶の内部に集中した。しかし、どの船舶にも、祐子の意識は見出せなかった。ヘリコプターが沖縄に近付くと、4艘の船舶が点々と航行しているのが見えた。亜希子が言った。

「残念ながら、どの船にも祐子お姉さまの意識は感じられませんわ」ヘリコプターが飛び立ってから既に3時間が経過している。あと30分で給油場所に向かいたいと副操縦士が言った。その時、亜希子が叫んだ。「もっと西に行って下さい。西の方に祐子お姉さまの意識を感じます」ヘリコプターは向きを西に操った。10分ほど飛行すると1艘の漁船が見えた。まさに中型の漁船だ。田辺が興奮して言った。

「リーダー、あの手の漁船ですよ。わたくしの想定にぴったりです」亜希子も興奮した。

「あなた、あそこに祐子お姉さまがいらっしゃいます。あの船の中に」副操縦士が言った。

「少し接近してみます。でも、もう燃料補給に戻らないとまずいですから、あと5分だけ接近してから一旦戻らせてもらいます。それからまた出直します。今、本部に連絡を取って、長崎県警に連絡を入れてもらいます。被害者があそこにいるのは確実なのですね？」

亜希子が応えた。

「はい、確かです。祐子お姉さまの意識が見えます。でも、さっきのような悲しみは感じません。ずっと安定した意識を感じます」

船は中型の内でも大きい部類に属する遠洋漁業の漁船で、ヘリコプターの離着陸もできるほど甲板は広い。船上に人の気配は無かった。副操縦士はあまり接近し過ぎないほうがいいと言った。相手がどんな武器を持っているか分からないと言った。本部から、「長崎県警からの応答があった」と連絡が入った。直ぐに捜索隊を出動させるとのことだった。航空自衛隊にも支援を要請すると言っていた。賢は藤代肇の力が働いているのを感じた。長崎県警からの連絡の中に42名の女性という言葉が入っているのがわかった。人数が増えている。それだけの女性が乗せられている漁船に、不用意に接近することは許されなかった。そこで副操縦士が「一旦給油に戻らせてもらいます」と言った。賢は了承した。

祐子たちの朝食は、パンだった。いつもより2時間遅れの朝食とのことだった。先ほどまでの戦慄も消え、女たちは皆助け合って、毛布を片付け、朝食の支度にかかった。男たちが通函箱に小さな包みを一杯入れて、厨房の方に運んで行った。暫らくして、今日の当番の女性の一人が金属の椀に食パン1個とベビーチーズ1個、それにペーストのパックを入れて配った。その後から、もう一人の女性が、オレンジジュースのパックを1パックずつ配った。山猫が目を輝かせて言った。

「随分変わったね。久しぶりに食事らしい食事が食えるね」

皆、微笑を浮かべて食事を受け取った。祐子よりかなり奥の方に居た27、8歳のカンガルーに似た小柄な女性がポツリと言った。

「結局は売られて行くんだから、いくら上手いものを食ったって、同じことだ」

それを聞いたゆうこ姉さんが大声で怒鳴った。

「あんた、さっき祐子さんが言ったことを忘れたのか!? 何時もよくなるって思えっておっしゃったでしょう。売られる、売られるって言っていると、本当に、悲惨な世界に行くことになるよ。たとえ千分の1でも、万分の1でも可能性があれば、希望を失わないことなんだよ。まだ分ら

ないのかい!？」

その声に、カンガルーは黙って俯いてしまった。いずれ売られてゆく運命の悲惨さを、希望に変えることのできた者は数えるほどしか居なかった。祐子もそのことは100も承知で「希望を持って」と言ったのだった。希望が光の通り道を作ることを、祐子は知っていた。これまでの人生で、何度も経験してきたことだった。

食事が済み、片づけが終わって皆夫々、トイレに行ったり、身づくろいを正したりした。暫らくすると急に外が騒がしくなった。天井を人が走り回っているのが分る。やがて、天井の扉が開いて、男が二人降りて来た。ひとりの男が祐子の近くに来て言った。

「姉さん、一寸一緒に来てくんな」

もうひとりの男は、階段の裏手に隠れるように座っている祐子と同じくらいの年恰好の、目が大きく丸顔の可愛らしい女の手を引いて立ち上がらせている。二人の男は祐子と丸顔の女を連れて、階段を登ろうとした。女たちは不安そうに二人を見つめている。ゆうこ姉さんが男たちに言った。

「祐子さんをどこに連れて行くんだい？」

男は一寸振り向いたが、何も言わずに二人の女性に階段を登るように指図して、その後に附いて登って行った。秋田犬が言った。

「Sさ。もうヘリが来ているんじゃないのか」

階段の影にいた女が言った。

「春子ちゃんもSだったのかな？」

秋田犬が言った。

「そのようだな。可愛そうに、悲惨な人生が待っているんだ」

秋田犬が言った。

「俺っちだって、同じさ」

「だけど、なんで、あんな神様みたいな人がそんな酷い目に遭うんだ」ゆうこ姉さんが、泣き声でそう言うと右手の袖で涙を拭った。

甲板の上には1台のヘリコプターが停まっていた。祐子と丸顔の女はそのヘリコプターに押し込められるように乗せられた。親分とやすが一緒

に乗り込んだ。左手を吊り包帯した次郎と5人の男たちが、「親分行ってらっしゃい」と言って頭を下げた。ヘリコプターは飛び立つと船の右手方向に向きを変えた。ヘリコプターからは間もなく船影も確認できなくなった。祐子はどこに向かっているのかまるで見当も附かなかった。祐子は、再び意識を肉体から切り離し、賢の下に移した。親分が何かを話し掛けてきたが、祐子には何も聞こえなかった。只、自分が空の上を飛んでいることしか分らなかった。祐子は目を瞑った。

どのくらい時間が経ったのか分からないが、やがてヘリコプターはどこかの地上に着陸した。ヘリコプターから降ろされると、今度はタクシーに乗せられた。祐子も春子も目隠しはされなかった。しかし、二人とも、何も見ていないようだった。親分とやすの二人と祐子たちを乗せたタクシーはどこかの私設空港のような場所に着いた。それから二人は小型のプロペラ機に乗せられた。プロペラ機は風の影響なのか、酷く揺れた。親分とやすは時々嬌声を上げていた。祐子と春子は声を発することは無かった。ただ、時々前の席の背もたれに頭を打ち付けた。二人の女性はまるで痴呆症の患者のようにボーっとしている。親分が言った。

「この二人、大丈夫かな？まるで反応が無い」

「へい、親分。わっしもそう思ってやした。春子姉さんの方は、シヤブ潰けだったから、ボーっとしてるのも分りやすが、祐子姉さんは正気でやしたから、一寸わからねえす」

「あっちに着いたら夜だから、取引は明日の朝になる。今夜、少し可愛がってやるとするか？元気出してもらわんことにや、商売にならねえからな」

「それがいいす。姉さんたちも疲れてるでしょうから」

やすはニヤニヤしながら言った。二人の女性は全く反応を示さなかった。

高速ヘリコプターが給油を終え、また船のところに戻った時、船は想定される位置には存在しなかった。福操縦士が言った。

「あれから1時間は経っていますから3～40キロ南方にいるはずだと考えたのは、一寸甘かったかもしれません。このヘリコプターは結構

音が大きいんで、感づかれた可能性があります」

また、亜希子に頼らざるを得なかった。賢たちは亜希子が居ることで安心してた。必ず見つかると思っていた。しかしその想定は外れた。亜希子は祐子の足跡を掴めなくなってしまった。「全く分らない」と言った。亜希子は暫らく透視を続けていたが、亜希子の疲労が酷くなったのを見て取った賢は、推定で探索を行うように副操縦士に頼んだ。台湾の方向が一番可能性が高いと思った。田辺も同じ意見だった。

それから夜まで台湾の方角を探索したが発見できなかった。ヘリコプターは一旦那覇のヘリポートに停泊して一夜を過ごし、更に翌日も朝からフィリピンのパスコ島の方面を探索したが、船舶の痕跡を掴むことはできなかった。祐子の拉致された船舶のすぐ目の前まで行きながら、見失ってしまったことを、3人は地団太踏んで悔しがった。それに輪を掛けて、亜希子が祐子を透視することができなくなってしまったことに、一層絶望感を深めた。しかし、翌日の午後になって事態は好転した。海上自衛隊の巡視艇が不審漁船を捕獲（ほかく）したとの情報が入ったからだ。賢たちは心の中で小躍りした。しかし、亜希子が祐子の意識を捕らえられなかったことに一抹の不安を抱いていた。賢は副操縦士に、巡視艇、長崎県警、海上保安庁に対し、捕獲船の甲板へのヘリの着陸許可を貰うよう交渉してもらった。なかなか許可が下りなかった。祐子の失踪を追跡中で、それが緊急を要すること、祐子の消息は船に幽閉されている者たちを確認してみないと分らないことなど、考えられる理由を並べ立てて漸く許可を得た。船舶の位置はフィリピンの東北東の沖約300キロの海域を北上中とのことだった。佐世保港までは悠に3日は掛かる。直ぐに確認したかった。ヘリが甲板に着陸すると、海上保安庁の2名の隊員が出迎えた。隊員は「犯行グループの男たちは逮捕しましたが、首謀者は見つからず、ヘリで逃亡した可能性が高いです」と言った。「逮捕者は固く口を閉ざしていて、何も話しません」とも言った。賢達3人は確認の為、直ぐに女たちが幽閉されていた船室に下りた。室内に足を踏み入れると、目を真っ赤に泣き腫らせた女たちが集まって来た。てんでにわいわい騒いでいる。賢が部屋の隅々にまで届くような大きな声で

言った。

「すみません。藤代祐子さんは居ませんか!? 賢です。内観賢です！」

「祐子お姉さま！祐子お姉さま……」

亜希子は泣きながら、叫んだ。部屋の中は一瞬水を打ったようにしーんとなった。ゆうこ姉さんが「わーん」とその場に泣き崩れた。集まって来た女たちは、全員がその場に泣き伏した。秋田犬が目に一杯涙を貯めてポツリと言った。

「あのひとは、神様みたいな人だよ」

また、女たち全員が、一層大きな声で泣き崩れた。賢は言いようのない不安に嘖まれた。

「祐子は、祐子はどうしたんですか!? どこに居るんですか!?!」

賢の声はうわずった。ゆうこ姉さんが涙を拭きながら言った。

「あ、あの方は……Sだったんです。……外国の金持ちに、高い金額で奴隷として売られて行ったんです。どこの国の、誰の元に売られて行ったのか、当事者以外誰にも分かりません。もう、探しようもありません。唯一つ、誘拐グループの親分と子分のやすという男も同行したことは分かっています。海上保安庁の人の話で分かりました。あの二人の姿が見えないのです。多分、ヘリコプターで連れて行かれたのだと思います。男がそんなことを言っていたのを小耳に挟んだことがあります」

亜希子は再び泣き崩れた。田辺も涙を流した。賢は直ぐに訊いた。

「それは何時ですか？」

「昨日の昼ごろだと思います」

3人は愕然となった。時間が経ち過ぎていた。3人はその場に座り込んでしまった。ゆうこ姉さんが話を始めた。

「あの方は、本当に神様です。わたしたちに、「たとえどんなことがあっても、最後まで、助かると信じていなさい」とおっしゃいました。そして、あの方のお言葉のとおりになったのです。わたしたちはみんな、「自分の人生もこれまでだ」と思っていました。でも、祐子さまはわたしたちとはぜんぜん違いました。あの方はご自分のお命さえ、投げ捨てられようとされたのです。わたしがあの方を……」

そこまで言うとうゅうこ姉さんは溢れ出てくる涙を袖で拭った。賢がハンカチを差し出した。うゅうこ姉さんはそのハンカチでもう一度涙を拭きなおして続けた。

「わたしがあの方を酷い目に合わせてしまったのにも関わらず、わたしが瀕死の状態の時にご自分のお身を呈してわたしをお守りになってくださいました。そして、朝になって死にそうになっていた人をご自分のお体で暖められて、命をお救いになりました。それから、ここにいるみんなのために、ご自分のお身も省みずに親分と交渉され、今まで地獄のようだった食事も、トイレも、風呂も普通の状態に改善されたのです。親分が自分の子分の不正を罰し、更にわたしたちの愚行を罰そうとしたとき、ご自分が総ての責任を取るとおっしゃって、鉦（なた）を振りかざしている親分にご自分の左腕を差し出されました。そんな祐子さまのお姿を観て、あの悪人の親分も、あまりの神々しさに敬服してしまいました。そして、祐子さまはご自分が連れ去られるまで、絶望しているわたしたちに、「決して希望を捨ててはいけない」とおっしゃり続けたのです。ご自分は最も厳しいSとして扱われているにも拘らずに。そして、祐子さまのおっしゃったとおり、わたしたちは救われました。あの人は女神様そのものです。女神様意外に考えられません」

また、女たちはすすり泣いた。亜希子も、田辺も泣いた。賢は心の中で、祐子に語り掛けた。

「祐子、俺がお前を守り抜くから、決して希望を捨てるなよ……お前の方が俺よりよく分かっているな」

そして賢は微笑んだ。

鶯谷

賢と田辺が失意の中を業務に復帰したのは祐子の失踪10日後である。ふたりとも疲れ切っていた。もう一息のところまで祐子を救い出すことができなかったことが、弥が上にも疲れを倍増させていた。ふたりは遅れを取り戻すべく、必死に作業を進めた。賢はプロジェクトの仕事に打ち込むことで、祐子が意識に上ってこないように勤めた。一旦祐子のこと

を思い始めると、もう仕事が手に着かなくなるのだった。愛子は賢が遅く帰るのに慣れてきて、賢が12時を過ぎて帰ってくる日は、一人でベッドに入って寝ることができるようになっていた。それは毎日原が来て、愛子の話相手になっていたからでもあった。原も東領製作所の契約社員として勤務していた。しかし、仕事がパーソナル・コンピュータの製造現場だった為、ほとんど定刻に帰宅していた。原の唯一の楽しみは愛子とふたりでやるダンスの練習だった。いつも愛子はバレエのレッスンの復習をし、原はそれを観て感想を言った。原はさまざまなスーフィードダンスを愛子に見せた。愛子もそのダンスが好きだった。特に、グルジェフのダンスというのが愛子のお気に入りだった。原の動きを真似てみたが、両方の手足を一定のリズムでばらばらに動かすことが愛子にはできなかった。時間があるときは、時には一緒に詩を書いたりもしたが、やはりダンスが一番気に入っていた。愛子は原から語録の説明を聞くのが楽しみになっていた。バレエのレッスンはルーチンワークの中に入っていて、踊っているとき以外は特に喜びの感情は湧かなかった。

祐子が失踪してから2週間が過ぎた。漸く概略仕様もまとまってきた。全部で1500ページに及んだ。楠木の活躍が大きかった。

「楠木さん、ほとんどお願いしてしまい、申し訳ありませんでした」

「いいえ、それより、藤代祐子さんを救出できなくて毎日さぞお辛いことでしょう。ここのところ社長のお姿もお見受けしませんし」

「そのことは仕事をしているときはできるだけ忘れるようにしています。いずれにしても、プロジェクトの概略仕様をまとめて、今週中に文部科学政務次官に提出しなくてはなりませんから、急がないとなります」

「あとは、インデクスと語彙説明を作るだけです」

田辺が言った。楠木はそれも大変な作業になると応えた。インデクスは楠木が担当し、語彙説明は田辺が担当することになった。賢はステアリングチームと経理部への説明、そして政務次官とのコンタクト、召還の掛かっている議員への説明、連携他社とのスケジュール調整を行うことになった。午前中に社内の調整は終えた。取締役で構成されたステアリ

ングチームも経理部長も特に異論を挟まなかった。既に楠木が根回ししてあるようだった。賢は楠木、田辺と共に昼食を摂りながら上層部との調整が順調に進んでいることを説明した。午後は政務次官に経過を説明し、その後で東領製作所に説明を求めている衆議院議員二人を訪問する予定だと言った。田辺はPCの能力をフル活用して語彙一覧を作成すると言った。楠木はインデクス抽出とコメントの作成を部下に任せていて、自分は仕様の裏付けを取ると言った。明日は早朝から東北支社との打ち合わせの為に出張すると言った。概略仕様の内容で、試行地域の土地確保の可能性を検証し、概略仕様との整合性を見てみたいのと言った。賢はこの日の政務次官や議員との打ち合わせ結果を二人に伝えておく必要があると判断した。説明したいので、夕食を共にしたいと言った。3人は6時に日暮里のレストランで会うことに決めた。田辺は、賢がまた自分の住まいの近くのレストランを指定したのを不服に思った。賢が自分に配慮をした決定をすると、いつも自分が一人前扱いされていないような感覚を覚えた。

「リーダー、そんな気遣いは無用です。わたくしを男だと思ってください」

楠木は声を出して笑った。賢が言った。

「だって、女じゃないか。駅前の裏通りや、墓地周辺は安心できないだろう」

「わたくしは、何年もあそこに住んでいて、危ない目にあつたことなど一度もありません。大丈夫です」

「分った、次からは上野辺りにするよ」

「リーダー！」

楠木はまた、笑った。

賢が二人目の議員への説明を終えたのは5時半を回ったときだった。賢は田辺に「少し遅れる」と伝言を入れた。レストランに着いたのは6時半だった。田辺がひとりで待っていた。楠木は10分ほど前に経理部長から電話を受け、予算案の矛盾点を指摘されて、その説明に急遽社に戻ったとのことだった。田辺は、自分が後で賢の説明を纏めて楠木にメー

ルしておくと言った。ふたりは直ぐに食事を注文した。和定食を頼んだ。ふたりは久しぶりに夕食を共にした。疲れを取ろうということになって、日本酒を頼んだ。運ばれて来た熱燗の徳利を田辺が取り、賢に向けた。「リーダーどうぞ」

「ありがとう」

九州にいた10日間、田辺は事細かく賢の身の回りの世話を焼いた。賢の心は祐子に向いていて、田辺の献身的な世話に対しても気もそぞろだったが、今こうして田辺を見つめていると、意識の外に置いていたそのときの情景が浮かび上がってくるのだった。田辺は何時も言葉少なく行動していた。しかし、何時も賢の傍に居て、いざという時は的確な判断をし、賢にその場での最適な選択をさせていた。

「田辺さん、これから、ふたりのときは梓って呼んでもいいかな」

「わたし、困ります・・・だって、両親以外の人に名前と呼ばれたこと無いから」

「呼びたいんだけど。その方が、近く感じるし」

少し時間を置いて、田辺が言った。

「はい・・・」

「じゃ、梓、今度の九州の件、本当にありがとう。帰って来てから、君とゆっくり話す時間も無くて。君にこれだけ世話になっておきながら、きちんとしたお礼も言うことができなかった。自分の心の狭さを思い知ったよ」

「リーダー、そんなことはおっしゃらないでください。わたくしのミッションですから。それに・・・」

「君が僕を奮い立たせてくれなければ、プロジェクトに復帰する気力も無くして、どうなっていたか分からない」

「あの時は、苦勞しました。わたくし、あれほど悲しみに打ちひしがれた人を見たことがありません。わたくしが何を話し掛けても、ぜんぜん反応しませんでしたから・・・声も聞こえてなかったんですか？」

「分かってもらえるかどうか難しいけど、僕は自分の意識をコントロールできるんだ。あの時は、体は君の近くに居たけど、意識は祐子を探し

て彷徨っていたんだ。だけど、君の声は聞こえていた。意識がそこに無いから、何の反応もしなかったんだと思う。君が僕の頬を叩いたって言ったね。でも、それも分らなかった」

「でも、リーダー、わたくしも辛かったんですよ。どんな言葉を掛けても、果物を口に持っていても、何も反応が無いでしょう。まるで植物人間だったんですから。それで、わたくし、自分が悴じゃだめだって思ったんです。藤代祐子になればリーダーの意識は戻るだろうって」

「君にそこまでさせた僕は、やはり自我が強過ぎたんだ」

あのとき田辺梓は、そんなにしてまでこの男の為に尽くす必要があるのだろうかと自問自答していた。

「確かに自分のミッションはこの男の女房役だ。しかし、それはあくまで仕事の上でのことだ。今は、状況が違う。既にこの男の私的な世界に入り込んでしまっている。もし、自分が藤代祐子としてこの男に接すれば、この男も意識が戻ってくるかもしれない。しかし、そのときには自分も失うものが大きい。いままで、これと言って好きになった男性もいなかった。ここまでは仕事一筋に打ち込んできた。充実した毎日で、このまま一生終わってもいいと思っていた。仕事はやり甲斐があった。しかし、もしここでこの男の恋人の代役を引き受けると、自分とは一体何なのか分からなくなる。自分が自分で無くなる。もし、この男に抱かれてもしたら、自己不信に陥ることは明白だ。しかし、自分はこの男に惹かれ始めている。この男は優しい。優し過ぎるほど優しい。この男に抱かれれば、この男も、自分に対して情が湧いてくるだろう。もしかすると、わたしのことを誰よりも愛するようになるかもしれない。いや、そんなことはあり得ない。この男の心の中には藤代祐子が根を下ろしていて、そう簡単にも変わると思えない。それに、この男を慕う女性が沢山いる。その中でもわたしは決して優位にあるとは思えない。でも、やはりわたしはこの男のことが好きなのかもしれない。そういう女性たちより、良く思われたいと思い始めている。他の女性より有利なのは、わたしがいつもこの男の傍にることだ。この男の癖も、性格も、頭のよさも、優

しさも全て知っている。この男に自分を捧げてもいいのかも知れない。いや、そんなことは、自分の人生で得になるはずはない。わたしはいずれ捨てられて、悲しい思いをさせられるに違いない。もし、この男の子供でも出来たら、惨めな思いをするのはわたしだ。愛されていない男の子供を抱えて彷徨わなくてはならない。それでも良いのか梓。それでも良いのか？・・・それでもいい。どうせ、わたしのこの人生は大海の泡（あぶく）のようなもの。これからどうなろうと、たいしたことではない。誰と出会い、誰と結婚して、どんな生活をするのか知れたものじゃない。日々の生活に溺れ、自分自身を見失うのが落ちだ。そうなるからでは、後戻りできない。子供が出来、家族が出来てしまったら、この社会では、それからの展開は無い。それより、この男、わたしの尊敬している、少なくとも愛し始めている内観賢に全てを掛けてみた方が、どれほど意味のある人生を生きることになるか知れない。よし、藤代祐子になろう」

田辺梓は心に決めた。目に涙を貯め、唯ボーっとしている賢の左手を引いて、賢の部屋に連れて行った。鍵を開けても、賢はそこにただ突っ立っているだけだった。梓は賢の腕を引いて部屋の中に入り、賢を窓際まで連れて行って、カウチに腰掛けさせた。梓は手に持っていたハンドバッグをサイド棚の上に置いて、賢の横に近付いた。賢は依然としてボーっとしたままである。梓は賢の左頬を自分の右手で平手打ちした。しかし、賢は全く反応しない。梓は賢の両肩を掴んで揺すりながら言った。「あなた、わたくしよ、祐子よ、しっかりして」

賢はハッとして、目を開けた。賢の目には田辺が見えた。

「田辺さん、祐子はどこにいるんですか？どこに？」

賢はきょろきょろして、あたりを見回していたが、少し目を閉じて、再びゆっくり目を開いたときには、また元の通りボーっとして意識が無くなったような状態になっていた。田辺は賢の姿を観ていると、哀れで涙が流れてきた。賢のことを愛しく思った。賢の傍に近付くと、ボーっとしている賢の頭を自分の胸に抱き締めた。

「あなた、わたしよ、わたし！あなた、愛しているわ！」

賢は直ぐに反応した。そして、自分を抱き締めている田辺を思い切り抱き締めた。

「祐子、無事だったのか。どうしていたんだ。ずっとお前を探していた。ここはどこだ。祐子、良かった」

梓は複雑な気持ちに捕らわれた。自分が自分でなくなったような気がしてきた。もう、祐子でもいいと思った。一旦祐子になると大胆になれた。

「あなた、愛しているわ。もっと強く抱き締めて」

賢は田辺を抱き締めたまま立ち上がり、田辺に口付けをした。田辺は頭がカーッとになって手をだらりと下に降ろした。賢は激しく梓の唇を求めた。梓はされるままになっていた。梓の意識も朦朧としてきた。賢はハッとした。そして、両手で梓の肩を握ると自分の体から梓を引き離した。

「あっ、田辺さん！ あっ、すみません、祐子と間違えてしまって・・・」
梓は賢の顔を見ることができなかった。ただ俯いていた。

「田辺さん、ごめん。祐子が戻って来たと錯覚してしまったんです。僕はどうしたんだろう。ここは・・・僕の部屋？ 田辺さんは・・・」

梓は朦朧とした意識をはっきりさせて言った。

「リーダー、気付かれましたか？ リーダーはずっと自性をなくしておいででした。だから、わたくしが藤代祐子さんに代わって、リーダーを呼び戻しました」

「そうでしたか、ぼくは情けない男ですね。自分を失っていたなんて」

「いいえ、わたくしは、それでもいいんです。あなたの女房役なんですから・・・」

梓は少し寂しそうに言った。

「リーダー、わたくしはあのまま祐子でいてもいいって、覚悟を決めていたんですよ」

「本当に済まなかった。あまりにも祐子を追う意識が強すぎて、周りが全く見えなくなってしまったんです」

「でも、リーダー、すごく力があるんですね。わたくし・・・」

そう言うと梓は下を向いて顔を赤らめた。

「梓、今日の話をしておきたいんだが・・・」

「はい。でも、今は食事をしましょう。後で、わたくしのアパートに寄ってください。リーダーの話をそのままパソコンに打ち込みますから。そこから楠木さんにメールします」

「そうだね。折角久し振りに一緒に食事ができたんだから」

そう言いながら賢が梓の猪口に酒を注いだ。梓はそれを右手でそっと取ると、左手を添えて、一気にきゅっと飲み干した。

「梓、君、飲めたっけ？」

「大丈夫。今日は飲みたい気分なんです」

・・・・・・・・・・・・・・・・

食事を終えて店を出たのは7時半過ぎだった。賢は愛子に連絡を入れた。まだ仕事が残っていると伝えた。愛子は、大丈夫だと言った。

賢は、大分酒が回って、足元のおぼつかない梓の後をアパートまで附いて行った。部屋に入ると、梓は顔を洗って来ると言っけて体を左に向けようとしてよろけた。賢が梓を支えた。梓は「大丈夫です」と言っけて賢から離れ洗面台のところに行っけて、そのまましゃがみ込んでしまった。賢は梓をベッドまで連れてゆき、横に寝かせてから、タオルに水を沁み込ませてきて、梓の額に当てた。

「リーダーすみません。だらしなくて」

梓の目から涙が流れ落ちた。

「何を言っけているんだ。僕は梓にどれだけ助けられたか知れない。これくらいのこと当たり前だ」

少しして、梓は立ち上がり、パソコンに向かった。賢はこの日の3つの打ち合わせ結果を説明した。酒に酔っけていても梓のパソコン捌きは見事だった。賢が説明し終えてからも梓は暫らくキーボードを叩いていたが、大きく息を吐くと賢を振り返っけて言っけて。

「リーダー、メール送りました。写しをリーダーにも送っけておきました。明日、確認してください」

「ありがとう。・・・梓、大丈夫か？」

「大丈夫です。さっきは、少し悲しくなっけてちゃっけて、座り込んじちゃっけて

んです」

「そう、おれも祐子のことを思うと悲しくなる。まだ、暫らくは辛いだろう」

梓は唇をきつくかみ締めて、涙を浮かべた。

「今日はありがとう。じゃ、明日またオフィスで会おう」

賢はアパートを出た。梓は窓の外を歩いてゆく賢の後姿を見つめていた。涙が頬を伝わって落ちた。

亜希子は悲しかった。必死に祐子を追い続けたが、すぐ目の前に居るところまで迫っていながら、遂に見失ってしまった。無念さと、悲しさが亜希子の心に重く押し掛かっていた。藤代家の中はしんとして誰も口をきく者がいない。時々家政婦が登紀子の所にやって来て小さな声で何かを相談するだけだった。亜希子は九州から戻ってからは部屋に閉じこもったまま、食事の時以外は一步も外に出なかった。その食事も、ほとんど家政婦に自分の部屋まで運んでもらって摂っていた。亜希子は時々祐子の写真を見ては涙を流していた。今は賢のことを考える気持ちにもなれなかった。祐子が今味わっている苦しい状況を思うと、涙が止め処なく流れた。祐子を見失ってから、亜希子は賢と一緒に何度も透視を試みた。しかし、どのように意識を巡らせても、祐子の痕跡を掴むことはできなかった。これまで透視を試みて、意識に何も引っ掛からないことはなかった。必ず何らかのイメージが浮かんだ。しかし、あの高速ヘリの上で祐子の意識を見失ってからは、どうしても祐子の意識を見つめることができなくなってしまった。亜希子は祐子が死んでしまったのではないかと思い、そんな思いを振り払おうとしたが、また直ぐにその考えが付きまとってきて離れなかった。存在が確認できないという状態は、死んでしまってこの世界から消えてしまったということ以外に、自分が何度も体験した、時空が切り替わった失踪しかありえない。祐子にそれができないことは、誰もが知っていることだった。「もし、死んでしまったのなら、祐子お姉さまは、どれほど無念だったことでしょう」と亜希子は思った。あの拉致されていた女性が話していた、女神のような

神々しい祐子の姿は想像することすらできなかった。亜希子は祐子の写真に向かって「祐子お姉さま、生きていらして」と言って、声を出して泣き出した。その泣き声に、気付いたのか登紀子がドアをノックしている。

「亜希子さん、どうしたの？大丈夫？」

亜希子はドアの近くに行き行って応えた。

「お母様、暫らくひとりにしておいてください。大丈夫ですから」

「本当に、何でもないのね」

「はい、ほんとうに大丈夫です」

亜希子は涙を振り絞って応えた。母が遠ざかると、亜希子はベッドの上でうつ伏せになり、声を忍ばせて泣いた。いつまでも悲しみが去らなかった。九州から帰ってから、両親とは一緒に食事を摂っていなかった。父が祐子に対して行った決断がどうしても分らなかった。父はあまりにもむごいことを祐子に押し付けたと亜希子は思った。なぜ誰にも相談もせず、電光石火のごとく、祐子を九州の、それも最も危険な部署に送り出したのか、説明して欲しくもなかった。亜希子は父親と顔を会わせたくなかった。亜希子が顔を出さないの、登紀子がしばしば亜希子の部屋を訪れたが、亜希子は食事のときに家政婦と顔を合わせる以外は、外に出なかった。生け花の稽古も、琴の稽古も全て休むと伝えた。

亜希子は暫らく泣いていると、自分が賢を求めていたときの感情が、今の感情によく似ていることに気が附いた。賢に会おうと思った。

その頃、賢は地下鉄門前仲町駅の出口から表通に出るところだった。賢の携帯が鳴った。亜希子が今直ぐに会いたいと言った。9時半を回っていたので、賢は明日にしようと言ったが、亜希子はどうしても会いたいと言った。賢は亜希子のテレポテーションの危険性を考えて、いつものレストランに来るように伝えた。ここなら、万が一、時空が切り替わっても出現しやすいと思った。案の定、賢がレストランの入り口を入ると、既に店の中に亜希子の姿があった。亜希子は紺のセーターにダークグリーンスカートを着ていて、その上に黒のコートを羽織っていた。目立たない服装だった。

「あなた、来てしまいました。寂しくて、悲しくて・・・」

そう言うと、亜希子は泣き腫らした目に涙を一杯貯めた。賢も亜希子の涙を観ると、急に悲しみがこみ上げてきて涙が頬を流れて落ちた。ウエイトレスが近付いて来た。

「こんばんは、お久しぶりです。どこでもお好きな席にどうぞ」

店には客が僅かしかいなかった。ふたりはいつも5人で座っていた席に着いた。ウエイトレスが言った。

「こんな遅い時間にどうなされたのですか？」

ふたりは黙って下を向いていた。ウエイトレスはふたりの涙を見て、それ以上聞こうとはしなかった。賢が言った。

「コーヒー2つお願いします」

「はい、かしこまりました」

ウエイトレスは、直ぐにその場を去った。

「あなた、わたくし、どうしたらいいのかしら。もう、生きていけないわ。悲しくて、悲しくて、何もする気になれません」

「亜希子、僕も同じだ。君と同じように、祐子のいない世界なんて考えられない。だけど、しっかり生き抜くことにしたんだ。なぜか解るか？」

「いいえ・・・あなたは強い方です。あなたはそうして生きてゆけるのですから。あなたは強い方です」

「祐子は生きている。生きているんだ、亜希子。君には掴めないかも知れないが、僕には分る。僕は、祐子が意識を自分の体から切り離しているんだと思っている。僕の近くにいつも祐子の存在を感じているからだ。あのヘリコプターで船に接近したときまでは、時々祐子の意識は僕から離れて、元の自分の下に戻っていたようだ。多分、あのゆうこ姉さんが話していたように、皆を助けていたときはきっとあそこに居たんだ。しかし、それからはほとんどずっと僕の近くに居る。だから、いくら亜希子が祐子を探しても見つからないんだと思う。祐子を追うと、僕に意識が向いてしまうんだ」

賢は浮かんできた涙を袖で拭って続けた。

「祐子は自分の身が危険に晒されていることを知っていて、僕に助けを

求めているんだ。僕の力が足りないから、助けに行くこともできない。
自分の不甲斐無さを、これほど辛く感じたことは無い」

「あなた、今夜はあなたの近くに居てもいいですか？」

「ご両親には黙って来たんだろう？心配するぞ」

「電話しますから。今日は「帰れ」っておっしゃらないでください。もしそう言われたら、わたくしは隅田川に身を投げます」

賢には亜希子の真剣さが分ったが、「それにしても、隅田川では死ぬないのにな」と思った。

「分った。愛子も待っていることだから、一緒にマンションに帰ろう。君の好きな場所だ」

ふたりはウエイトレスが持って来たコーヒーに手も付けずに店を出た。部屋では愛子が賢の帰りを待っていた。賢は鶯谷の梓のアパートを出た時に愛子には電話を入れていた。愛子は亜希子の姿を観ると喜んだ。

「いらっしやい。亜希子さん随分遅くにおいでですね」

「ええ、今晚は泊めて頂きたいの。お願いね」

「もちろん喜んで。・・・直ぐにお茶を入れます。賢パパ、直ぐに服を着替えてね。あ、その前に亜希子さんお風呂に入りませんか？」

こまごまと動く愛子に、亜希子は嬉しくなった。やはり、ここが自分のいるべき場所だと思った。亜希子は麻子の骨壺の前に行って両手を合わせた。

「賢パパ、ゆきさんから大きな荷物が届いているわ。それから、亜希子さん、お風呂入ってくださいね」

「はい、・・・賢さん、お先に頂きます」

愛子は寝室に駆けて行って、パジャマの上下と下着を持って来て亜希子に渡した。

「亜希子さん、よかったらこれ使ってください」

「ありがとうございます。愛子さん、突然伺ってごめんなさいね」

「いいえ、わたしは、久しぶりに亜希子さんにお会いできて、嬉しいです。今夜は、一緒に寝ていただけますか？お話したいから」

「ええ、喜んで。愛子さん、もうわたくしでも大丈夫なの？」

「はい、もう、何も怖くありません。皆さんのおかげです。もう大丈夫です」

書棚の脇でゆきからの荷物を開けていた賢が言った。

「亜希子、体も、心も、芯まで暖まるまで、ゆっくり入れよ」

亜希子は嬉しかった。パジャマと下着を抱えるようにしてバスルームに向かった。愛子は茶を入れると、そうそうにソファの上に毛布と枕を用意している。賢をそこに休ませるつもりだ。

「賢パパ、亜希子さんの次に入ってね」

「愛子、入ったのか？」

「ううん、わたしは最後に入るわ」

「先に入りなさい。僕は少ししたいことがあるから」

「はい」

包みを開けると中から、例のボールが出てきた。一通の手紙が添えられていた。

「親愛なる内観賢様

祐子お姉さんのことを伺い、わたしたち家族は、毎日おくないさまにお祈りをしています。全員が集まって、仏壇の前で毎朝、毎晩、お願いのお祈りをしています。今度ばかりは特別に、最初にお願いをさせていただいています。「どうか祐子お姉さまをお救いください」って。それから、10分間、祐子お姉さまが戻って来て、みんなが喜んでいるところを想像し、最後に「わたくしたちのお願いをお聴きくださりありがとうございます」と感謝のお祈りをしています。でも、それだけでは、安心できなくて、何とかお役に立てないか、みんなで話し合いました。信次が面白いことを言いました。「おれ、あのボールをお姉ちゃんに送ってやったらいいとおもうぞ」って言ったんです。皆、何を言い出すのかと思いました。信次に「ボールを送るって言ったって、祐子お姉さん、どこにいるか分らないじゃない」って言ったら、信次が、「あいつ、どこにだって行けるぞ。それにあいつ、太郎兄ちゃんが怒っているとき、赤くなるぞ。・・・だから・・・悪い奴がいたら、あいつが赤くなったときに祐子姉ちゃん、逃げればいいんだ」って。みんな、なるほどと感

心しました。わたしたちの知恵はその程度ですが、信次の考えが、一番役に立ちそうです。このボールをお送りします。賢さんでしたら、このボールをうまく役立てていただけたらと思って、一寸恥ずかしいですが、お送りすることに決めました。少しでも祐子お姉さんを助ける役に立ていただければ嬉しいです。賢さんをはじめ、皆様のおかげで、わたしたちは幸せになりました。みんな、今まで以上に元気で、闊達に生きています。父にも無罪の裁定が下りました。誤審の保障のお話で、最近よく、父と母が裁判所に呼び出されています。皆様には、いくら感謝しても、感謝し足りない思いです。父も暫らくすると、盛岡に戻って来れそうです。わたしたちの幸せを、どうか祐子お姉さんに分けていただくよう、神様にお願いしています。早く、祐子お姉さんが見つかりますように。

ゆき」

賢はボールを取り出して、しげしげと見つめた。白かったボールが灰色になってきた。賢は、じぶんの悲しみを映していると感じた。愛子が後ろから声を掛けた。

「賢パパ、それ、なーに？」

「とても不思議なボールだよ。怒ると赤くなるし、喜ぶとピンク色になる。まるで、人間のオーラの色に反応するようなボールなんだ。それに、見える人には、このボールが大きくなったり、小さくなったりするの分るらしい。どこかに消えてしまったり、戻って来たりもするんだ」

「へーっ。不思議ねえ。ゆきさんが送ってくれたの？」

「うん、信次くんが言い出したようだ。祐子を助ける為に使って欲しいって。いつも太郎君の真似ばかりしているみたいだけど、あいつもなかなか知恵があるな」

そう言いながら、賢はゆきからの手紙を愛子に渡した。愛子はそれを読んで涙を流した。手紙を賢に返すと、黙ってバスルームに向かった。亜希子が風呂から上がっていた。

「あなた、お先に頂きました」

亜希子は賢の近くに来ると、愛子に聞こえないような小さな声で賢に言

った。賢は亜希子にも、ゆきがボールを送ってくれたこと、皆祐子のことを心配して毎日祈っていることを話し、ゆきの手紙を渡した。亜希子は手紙を半分ほど読んで、また声を忍ばせてすすり泣いた。途中から、涙で字が霞み、読めなくなってしまった。賢は亜希子が泣き止むまで待った。暫らくして、袖口で涙を拭いてから、亜希子は続きを読んだ。そして、その場で両手を合わせて瞑目した。2, 3分瞑目してから、目を開き賢に向かって言った。

「あなた、わたくしをここに居させてください。わたくしも、毎日あなたや、愛子さんと一緒に祐子お姉さまのことをお祈りしたいのです」

「ご両親がお許しになるかどうか分らないよ」

「きっと許してくださると思います。父は、わたくし達に会わせる顔が無いのです。どこかで謝罪をしたいと思っている様子がよく分ります。わたくしがその謝罪の為にこちらに伺って、お祈りを続けると言えば、必ず聞き入れていただけると思います。それに、ここには愛子さんが住んでいらっしゃるから、両親も安心すると思います」

賢は亜希子の言う通り、最近藤代肇が賢を避けているのが気になっていた。

「亜希子、君がご両親の了解を取ることができたら、その提案を受け入れることにするよ。そうなったら、このソファベッドで僕が寝るから。亜希子は愛子と一緒に寝てくれるか？」

「はい」

亜希子は途端に元気な声を出した。

愛子が風呂から上がると、亜希子と愛子にはこやかに話しながら、揃ってベッドルームに入って行った。

亜希子は翌日一旦家に戻った。昨夜、両親は心配して朝まで眠れないで居た。亜希子は両親に連絡を入れていなかったのだ。亜希子が今朝家に帰ると、父もまだ家に居た。亜希子は直ぐに両親と会った。そして、両親の前でさめざめと泣いた。暫らくして泣き止むと、両親に自分の決心を話した。父のことは責めなかった。両親はじっと黙して亜希子の話を

聴いていた。

「わたくし、祐子お姉さまをお助けしたいのです。今となってはお祈りするしかないのです。祐子お姉さまを思う気持ちの強い人たちと、一緒にお祈りしたいのです。だから、暫らくは、内観さんと愛子さんの居るマンションで一緒に生活したいのです。そうしないと、わたくしはまた、どこかに消えてしまいそうなのです。今度消えてしまったら、もう戻って来られないような気がします」

最後の一言で、終に両親は折れた。亜希子は喜んだが、しかし打ち沈んだ様子は変えなかった。自分の部屋に入ると直ぐにスーツケースに大切なものを詰め込んだ。出掛けに、登紀子が衣類や寝具、その他の雑貨品を見計らって、後でトラックで送ると言った。夕方には亜希子はスーツケースを持ってマンションの部屋に戻って来た。愛子が帰ってから直ぐだった。愛子は、亜希子が自分の帰るのをどこかに隠れて待っていたのではないかと思ったほどだった。亜希子が部屋に入ると間もなく、登紀子から、荷物をトラックで送ったという電話があった。愛子が亜希子のスーツケースの荷物の整理を手伝った。

その日から亜希子は賢のマンションの住人になってしまった。

それから1ヶ月が過ぎた。依然として祐子の消息は途絶えたままだった。警察も打つ手が無くなっていた。I C P O（国際手配事務局）からも何の連絡も無かった。小山田の行方も不明だった。ヘリで逃亡した漁船にいた女性誘拐犯グループの二人は元佐世保漁港の漁船の船長とその乗組員であることが、逮捕された次郎や子分たちの証言で明らかになった。しかし、親分柏木権蔵とその子分やすは身寄りの無い男で、佐世保に住んでいた頃は、同じ借家の屋根の下に親子のように暮らしていたということが分った。水揚げも少なくなり、日々の暮らしに困ってきていて、誘拐に使った船は過去に、ある船主から安い値段で譲り受けたが、その時にした借金の返済に苦しんでいたようだった。よく、焼酎を煽りながら、「生きるのが嫌になったなあ」などどこぼしていたのを、次郎達は聞いていた。警察は、二人が船を捨てて、祐子と春子の二人を誘拐し、

海外に逃亡を図ったものと考えていた。次郎の証言から、柏木はどこかの国の政治家の奴隷として、祐子と春子の人身売買契約を結んでいて、既に契約金として、4, 5百万円を受け取っていたということが分った。柏木は中国語が少し話せるようで、多分、中国人のブローカーを通じて、海外に祐子と春子を売り飛ばしたのだらうというのが、現在までの警察の推測だった。次郎達は、上手く追跡の手を逃れた場合、インドのどこかの港に船を着けることになっていた。船の停泊位置は、首尾よく次郎達が逃げおうせることができた場合に、柏木から連絡を入れることになっていたと次郎が自白した。次郎は指を詰められ、捨てられたことで、柏木に対する不信感を募らせていた。自白を得られたのは逮捕後2週間経ってからだったので、警察は既に追跡不可能と判断していた。

「親分は、俺たちに連絡を取る気があったのかどうかわからねえ」と次郎は嘯いていた。

亜希子は明るさを取り戻して来た。夜になると賢に会えたし、朝まで賢の近くで過ごすことができた。近頃では賢が帰るまでの時間も、原が話してくれる語録の説明を愛子と一緒に聞くのが楽しみになっていた。

「今日はひとつ面白いことを説明してみようか？」

原が言った。亜希子と愛子は是も非もなく賛成した。意味の分からないことも、質問すると、原が実例を示して説明してくれるので、それはまたそれで面白かった。

「オーラって知っているでしょう。その話をしてみようかと思うんです」

「オーラって、あの人間から出ている見えない色のことですか？」

愛子が訊いた。

「そう、愛子さん、知ってますか？僕の語録にもオーラに関係する部分があるんですよ。これはここだけの話ですけど、僕の語録には30番以降があって、所長は31から42までを記録しているんです。でも31番からは専門的なので、一般の人には見せていないんです。42番目のその先もあるんですが、今のところ僕の頭の中だけに留めてあります。その31番目の項目にオーラに関係することが記載されているんです。

まあ、9番目も少し絡みますけどね」

亜希子が言った。

「9番目って、あの「全てのものは基底振動数で振動している」というむずかしい内容の項目ですね」

「そう。物質的なものも、精神的なものも全てね」

愛子が言った。

「でも原さん、物が何時も振動しているようには見えないけど。振動が小さいんですか？」

「そうですね、一寸物質について考えてみましょうか。例えば物質を構成している原子が原子核の周りを回る電子を持っているのは知っていますね。電子の回転運動、あれが振動なんです。科学者は原子より更に小さい究極の素粒子を超ひもなどと呼んでいますが、超ひもは単独の素粒子ほどのマイクロのものからダークマターを創り出すほどの宇宙大のものまでであると謂うんです。いくら論理的なつじつまが合うと言っても、これはもう科学とは呼べないですよ。もっとも超ひも理論は、人間の意識の作用や重力、素粒子間の力など解決できない要素を取り込んで考えられた仮定に基づく素粒子理論で、僕からすれば統一場理論を確立するために苦し紛れに生み出した理論としか思えないんですが、この空間にはその超ひもと呼ばれる素粒子が無数に存在していて、それぞれ気の遠くなるほどの超高速振動をしていると考えられているんです。その振動によって原子が構成され、更に原子の振動が他の原子に伝わり、結合して分子を構成し、それが更に拡大して物質にまでなってくる。それから、いろいろな物質の寄せ集めになってきて、元々持っていた基本の振動数とは異なった低い振動数で振動するようになるのです。それは物質の重さや、形によって異なってきます。振動とは言っても外側ではなくて、内側の振動なんです。だから外からは振動しているように見えないんです。だけど人間が、目で物を確認できるのは、その物にぶつかって反射した光を、脳が判断してそれを物と感ずるからなんです。そして、物質の持つ色はその色の波長の光を反射するからでしょう。それが光レベルの共振つまり、光と同じ波長で振動することなんです。物の表面で起き

ていることなんですけど、その時、同時に物の内部もその振動を受け取って振動するのです。光を受けると暖かく感じたりするのはそのためなんです。その振動数の波動つまりエネルギーを強く与えてやると、物質は結び付きの力から解放されて、元の原子、更には素粒子にまで戻ってゆくのです。強いエネルギーというのには、たとえば熱だとか、圧力だとか、強い振動だとかがあるけど、その中の強い振動の振動数が、もし物質の基底周波数に合っていると、物質が簡単に分解されてしまうんです。分子と分子も振動を通して結びついていて、それで物質が出ているから、その振動をあまり大きくすると、結びついていられなくなるんです。分解して壊れてしまうんですよ。よく風で大きな鉄橋が落ちたりするでしょう、あれは橋の持っている固有振動数が、風の持つ固有振動数に一致してしまい、共鳴を起こしたからなんです。一寸怖いんですよ。だから、無闇やたらに物に不必要な強いエネルギーを与えてはいけません。自然に出来上がったものを、無為に破壊する行為は、最終的には自分自身の破壊に繋がるんですよ。あなた方にはまだ理解できないと思いますけどね。ほとんどの人は分かっていないですね。そう、人類は自然をどんどん破壊していつているけど、存在の摂理に反する行為なんです。ダムや、ゴルフ場などがその分りやすい例ですね。自然の循環が無くなって、調和が崩れ、荒廃だけが残る……」

「難しいわ。素粒子や原子の振動が物質にまで伝わっていることだけは分かったけど、どうして、それが夫々の物質に固有なの？」

「それは、夫々の物質が皆違った重さや違った形をしているから、振動数も固有になるんですよ。それは物質だけじゃなくて、想念も、意識も全てそうなんです。オーラの色は想念の色。それは想念の振動の色なんです。ゆきさんが内観さんに送ってきたボールは人の想念に反応してオーラと同じ振動を内部に発生させ、その振動の表わす色の光を、人間の脳が判断できるように3次元に翻訳して表示する装置のようなんです」

そう言いながら、原はゆきのボールを書棚から持って来てソファの前のテーブルの上に置いた。

「まず、愛子さん、ちょっと一番好きなものを考えてみて」

愛子は目を瞑った。暫らくすると、ボールがピンク色になってきた。

「じゃ、愛子さん目を開けて、ボールがピンク色になっているでしょう。あなたの今の想念の色ですよ。じゃ、もうそのことを考えないで。今度は亜希子さん、悲しいことを考えてみて」

亜希子は祐子のことを思った。亜希子の目から涙が流れた。ボールは青色になり次第に灰色になっていった。

「原さん、分りました。でも、とても辛いから…」

「ごめんなさい、もうここまでにしませう。このように、オーラは想念の振動を表わしているんです。でも次元がこの3次元ではなくて、4次元なので、慣れていない人には見えにくいと思います。このボールはそれを見えるようにしてくれる装置なんですよ」

愛子が言った。

「このボール、誰が作ったのかしら？」

「多分、この地球上の人じゃないと思いますよ。今の地球の人の中には、この装置を作れる人はいないと思います」

「じゃ、宇宙人？」

「多分外の天体から、たまたま様々な条件が揃ってこの地球上に転送されて来たんだと思います。それか、今は具体的には考えられないけど、このボールは高い次元とこの3次元に跨って存在しているのかもしれませんが。それなら、時空間は関係なくなりますからね。そのほうが真実に近いかもしれませんね」

愛子は感嘆の声を上げた。

「ひえー、すごい。そんなものがどうして、ゆきさんの所にあったのかしら？」

「僕も、それが理解できないんです。あのあたりの場の影響でしょうかね」

「賢パパはいつも、「このボールをどうしたら、祐子さんを捜すのに役立てられるだろうか」と考え込んでいます。原さん、何かいいアイデアはありませんか？」

「確か、弟の信次君が、このボールは知らないうちにどこかに行ったり、戻って来たりするって言っていましたね。それをうまく使ったらどうでしょうかね」

「と言うと？」

愛子は原の顔を覗き込んだ。

「このボールを祐子さんの所に送るのです。送ると言うより、このボールに祐子さんの所に行ってもらうのです。このボールは相手の感情や想念の動きに反応しますから、もし、祐子さんが持っていれば、危険が迫ったときには、ボールが事前に察知するから、直ぐに対処できると思います。それにこのボールは大きくなったり、小さくなったりすることだから、うんと小さくなってもらって、誰にも気付かれないように持っているようにできると思うのです。上手くいけば、このボールに伝書鳩のような働きをしてもらうこともできるかもしれません。テープで手紙を貼り付けて……いろいろな使い道がありそうです。多分内観さんは、そういうことは考えたと思うのです。それより、このボールを使って、何とか祐子さんを助け出せないかを考えているのだと思います」

「でも原さん、どうやったら、このボールが望むところに行ってくれたり、戻って来てくれるのかしら？ どうやったら、大きくなったり、小さくなったりしてくれるのかしら？それが問題でしょう」

亜希子が尋ねた。

「そう、そういう時は実験をするんですよ。演繹法を用いて、どういうときに移動できるのか、どういうときに小さくなるのかを探ってみるのです。それが確認できたら、それを実施してみるんです。たとえば、亜希子さんはテレポテーションができるでしょう。そのときの状態を想定して、それと同じ条件の下にこのボールを置いてみるのです。一寸やってみましょうか？」

亜希子は原が言うように一人でベッドルームに入って、扉を閉めた。それからボールに自分の所に来るように呼び掛けてみた。しかし、原がじっと見つめているボールはびくともしなかった。5分ほどして、亜希子はベッドルームから出て来た。

「何度もボールを呼んで見ましたが、心に感じませんでした。少しは動きましたか？」

「いや、駄目でしたね。何か考え方が間違っているのかもしれませんが。それと、もしかすると動いていたのかもしれませんがね。違う時空間で」愛子が言った。

「原さんがあまりじっと見るんで、恥ずかしかったんじゃないの？」

「そ、そうだ。そ、それですよ。僕が見つめたから、そこに位置が固定されたんです。確か内観さんの話では、信次君が「ボールが知らないうちに移動していた」と言ってたようです。亜希子さん、申し訳ありませんけど、もう一度お願いします」

亜希子がもう一度ベッドルームに入ってゆくと、原と愛子はテレビを点けてニュース番組を探した。どこもニュースはやっていなかった。仕方ないので、NHKのスマートレビュー・ナウを見た。星の衝突のアニメーション映像が流れていた。ふたりともテレビに見入ってしまった。それは太陽系の惑星と、大型の彗星の衝突時の衝撃をシミュレートしようとして試みた番組だった。ガタッと音がして、亜希子がベッドルームから出て来た。ボールを抱えていた。原はそれを見て小躍りした。

「やった！やりましたね。どうやら、ボールは呼べそうですね」

「ええ、わたくし、びっくりしましたわ。目を開けたら、これ、わたくしの目の前に、空中に浮かんでいたんですよ」

「すごいです。でも、今日はこの位にしておきましょう。もう、帰る時間になったし」

原が帰った後、愛子も挑戦してみたが、ボールはびくともしなかった。亜希子の超次元意識の作用に愛子も脱帽した。それから暫らくして賢が帰って来た。

「あなた、お帰りなさい」

始めのうち、愛子の前で賢に対して「あなた」と呼びかけられなかった亜希子も、思い切って言って見ると、意外に自然な感じだと、自分でも納得してしまった。愛子も特に違和感を覚えないようだった。

「ただいま。今日はどうだった？」

「賢パパ、今日は面白かったわよ。原さんがボールの実験をやったの。亜希子さんがボールを自分のところに呼べたのよ」

「そうなのよ、あなた。わたくしが呼んだとき、このボールはわたくしの目の前に来て空中に浮かんでいたのよ。感激してしまいました」

「それはすごい、愛子も呼べたのか？」

「ううん、わたしにはできないわ。そうだ、賢パパ、一寸やってみて」

「どうすればいいのかな？唯、意識で呼べばいいのかな？」

「ええ、わたくしは、目を閉じて、ボールに語り掛けてみました。「こっちに来て」って」

「わかった、一寸やってみる」

賢が目を閉じると、ボールは亜希子と愛子の目の前で次第にポーっとなくなって消えてゆき、賢の顔の前に現われた。

「すごい、賢パパ、亜希子さんのときは、ボールを見ていると動かなかったのよ。賢パパはすごいわ」

「すごくはないよ。ただ、ボールと僕が通じ合えただけだよ。だれでも慣れればできると思うよ」

「わたし、30分ぐらい挑戦したけど、駄目だったわよ。亜希子さんがすごいと思ったけど、賢パパはもっとすごいわ。わたしたちが見ていてもボールを引き付けちゃうんだから」

「多分、みんなと違うとすれば、僕はこのボールも自分の一部だと思っているからかな。だから、自分の手を動かすような感じかな。そう、そういう感じだな」

この日は賢も10時前に帰って来たので、二人の女性は賢に先に入浴するように頼んだ。賢も直ぐに応じた。亜希子はこの家に来てから、一度も賢に触れていなかった。今日こそは自分に触れてもらいたいと思っていた。賢に続いて、亜希子が入浴し、最後に愛子がバスルームに行くと、亜希子が賢の近くに来た。

「あなた、今日のお仕事はいかがでしたか？プロジェクトの企画も、もう、随分進んだんでしょうね？」

「いや、まだまだ序盤の攻防だよ。やっと文部科学事務次官の概略仕様

の通読が完了して、ぼつぼつ質問が出てき始めた段階だ。これからが大変だ。それより、亜希子、随分辛い思いをさせたな。もうこの生活も大分慣れたか？」

そう言うと賢は亜希子の手を引いて自分の横に座らせた。亜希子は久しぶりに胸の鼓動が早くなるのを感じた。亜希子が返事をしようと賢のほうに顔を向けたとき、賢は、亜希子の体を引き寄せて口付けをした。亜希子は目を閉じて、深い溜息を吐いた。賢は黙って亜希子の頭を抱き締めた。亜希子は涙が溢れてくるのを感じた。声を出して泣いた。祐子のイメージが浮かんで来て、体が震え、悲しみの感情を抑える事ができなかった。

「亜希子、さあ、祐子の無事の生還を祈ろう。現実化するように祈ろう」
亜希子は賢から体を離して、賢のしぐさに合わせて瞑想に入った。瞑想に入ると、悲しみは無くなった。広い宇宙空間が眉間に展開した。自分も、祐子も、賢も非常に小さな存在のように見えてきた。愛子が風呂から上がると、3人揃って麻子の骨壺の前で瞑目してから、亜希子と愛子はベッドルームに向かった。

賢は一人になると、この日の出来事を逆に辿る省察を行った。会社の前で梓と別れた。梓とは午後一杯、スピリチュアルな世界を築き挙げて来た各国の霊的スポットを調査する為の出張計画を立案した。概略仕様に記載された3次元的なインフラ整備の他に、多くの人々に意識的に生きることの重要性を納得させる手法を考える必要があった。世界中の霊的に高いレベルにあると思われる地域や、組織を訪れて、そこの地域、組織に特有の社会のありさまを探ろうという点で、賢と梓の意見は一致した。どこを訪れるべきかという検討を梓とふたりで行った。プロジェクトルームには梓とふたりきりで居た。梓はPCやファイルを手際よく扱い、時々コーヒーを入れたり、散乱した書類を整理したりと、気を使ってくれた。賢の意識は兎角、「もしかしたら、この調査出張で祐子の手掛かりが得られるかもしれない」と期待する方向に流れそうになった。自分を必死に戒めていた。賢は自分の意識の方向が、純粹にこの世界の人々の意識を改善する方向にだけ向いていたかどうかを見つめてみた。

もっと純粹にならなければならないと反省した。出張は先ずアメリカン・インディアンの調査から始めることにした。この時にフェニックスに立ち寄ろうと思った。田辺も賢の両親のことは理解していて、その案に賛成した。そこから時間的に可能であればバミューダトライアングルの調査を行い、更にメキシコ南部のマヤの人たちの生き方の調査、そして南米に移り、インカの国ペルーの調査をしてから、イングランドに行く。ケルトの調査、そして、アフリカに渡りドゴン族の調査、エジプトのルクソールの調査、そこからチベットに行きチベット密教の調査、ブータンの国のありさまを調べ、その対極にある霊的大国インドの霊的偉人の足跡の調査を終えて帰国したいと考えた。しかし、賢は逆のルートの方がいいと思っていた。それは、祐子がアジア、特にインド辺りにいるような気がしたからだ。インドには未だに人身売買の組織が存在していて、売られる女性を奴隷として買い取る富裕層があると耳にしたことがある。それに「誘拐漁船はインドの海岸のどこかに行くことになっていた」と次郎が証言している。そんなことを考えながらプロジェクトの仕事を進めていた自分に気づき、仕事に対する意識の純粹性が足りないことに気付いたのだった。この日の午前中は関連する4プロジェクトの主幹企業のリーダーとの接触を図った。10時から高輪のホテルの会議室で5社のリーダーが会合を行った。賢は4人とは初対面だった。賢が九州に居る間に1度顔合わせがあつて、その時は楠木が出席していた。4人とも賢よりずっと年上で一人はもう60歳を超えていると思われた。4社とも現在概略仕様や予算案を取りまとめ中で、賢の会社が最も先行しているように思われた。しかし、この段階で先行することは特に重要ではない、むしろもっと慎重に進むべきだ。朝は、前日の文部次官との会合のレビューと概略仕様のレビューを行った。賢が部屋に入ったとき、梓は既にプロジェクトルームのテーブル席に着いていた。賢が「おはようございます」と言うと、梓は賢の方をチラッと観て、直ぐに視線をテーブルに移し、「おはようございます」と返した。そして、直ぐに席を立つと、コーヒーマーカーから熱いコーヒーマーカーをカップに注ぎ、それを持って来て賢の席に置いた。賢は「ありがとう」と言って梓に微笑み

掛けたが、梓はただ、「いいえ」と言っただけで、賢の顔を見ようとはしなかった。梓は、一日中、賢と目を合わせないようにしていた。賢は省察をしてみて、それが、朝顔を合わせた時からだったと分った。賢はそれから順次、マンションで起床したときまで逆過程の省察を続けてから、梓に携帯でメールを入れた。

「梓、今日はどうしたんだ。僕の顔を見ようとしなかったよな。僕が何かまずいことでも言ったのかな？もしそうなら、謝るよ」

梓から直ぐに返信が来た。

「いいえ、リーダー、唯、リーダーの顔を見られなかっただけです。何でもありません。わたくしがおかしいのです」

賢は直ぐに返信した。

「何でもなくて、良かった。今日はいいアイデアを出してくれて、ありがとう。海外出張、楽しみだね。じゃ、おやすみ」

梓から、返信が来た。

「おやすみなさい」

それから更に2週間が過ぎ、概略仕様に附いて文部次官の暫定承認が得られた。賢は霞ヶ関に行つてその通達を受けて来た。一部実施時期の延期を呑まざるを得なかったが、ほぼ原案通り承認された。全てが順調に推移しているように思えた。その日は賢、楠木、梓の3人は楠木と梓の部下たち5人を連れて、新橋の高級中華料理店で祝杯を挙げた。5人の部下の内4人は30歳以下の男性で、一人は31歳の女性だった。8人はひとつの円形テーブルに案内された。初めはビールで乾杯し、それから紹興酒に切り替えた。コース料理が前菜から順に運ばれて来た。賢はあまり箸を付けなかったが、隣の席に座った梓が、テーブルが回転されて、料理が自分の前に来ると、必ず先ず賢の取り皿に取ってから、次に自分が取った。テーブルに料理が運ばれて来ると、皿は直ぐに空になった。宴会は1時間半で終えた。5人は楠木に連れられて、銀座に繰り出して行った。楠木がいい店があると言っていた。賢と梓はそこから帰ることにした。少し歩くと、工事現場の横の上方に幌のかけてある長さ3

0メートルほどの渡り板の上を、賢は梓を気遣いながら歩いた。その時、賢は意識の中に鋭い褐色の光線が光っているのに気付いた。その光線は自分に目掛けて上方から突き刺さるように降りてきた。賢はいきなり梓の右手を取ると、身を翻して、車の走っている車道に飛び出した。1台の乗用車が急ブレーキを掛けて停まった。次の瞬間、長さ5メートルほどで100ミリ角のチャンネル材の鉄棒が幌を破り、渡り板の上に落ちて、地響きのような鈍い音と金属同士がぶつかる音を立てた。賢と梓は間一髪で難を逃れた。急停車した乗用車から紺のスーツを着た男が降りて来た。

「危ないじゃないか！ふざけるな！もう少しで、……………」

男はそう言い掛けたが、鉄材の落ちた跡と、自分の車の周りの黒山の人だかりを見て、直ぐに車に戻ると、クラクションを鳴らし、人を押し分けてもするように強引に進んで行ってしまった。梓の顔は真っ青だった。賢は労わるように梓に言った。

「大丈夫か？怪我は無かったか？」

「は、はい……………わたくし、まだ震えが止まりません」

賢は、梓の背中を抱きかかえるようにして、急いでその場を去った。賢は「狙われている」と思った。そのとき、早瀬由美からテレパシーが届いた。「あなた、大丈夫ですか？何か危険な状態に陥ったのではないですか？」

賢は直ぐに応答した。

「大丈夫だ、あとで、テレパシーを送るよ」

賢は梓を抱えるようにして、雑踏を避け、直ぐにわき道に逸れて、一番近くにある喫茶店に入った。

「危なかったな。何か意図的なものを感じる」

「リーダー、どうして分ったのですか？」

「攻撃的な光が見えた。我々に向かって来た。危ないと思って、その光を避けたんだ」

「どうして、直ぐに犯人を追わなかったんですか？」

「それは無駄だと思う。いや、むしろもっと危険な目に遭ったかも知れ

ない」

「わたくし、怖いんです。今日は本当に怖いんです」

「僕が、君を守って家まで送るよ。多分、攻撃は君に対してじゃなくて、僕に向けられていたんじゃないかと思う。だけど、もし、危険だと感じたら、明日は1日待機していた方がいいかもしれないな。うん、そうしよう。明日は僕が出社して様子を見てみるよ」

「リーダーだって、危険じゃないんですか？」

「危険を恐れて行動しなくなったら、多分、相手の思う壺じゃないかという気がする。だから、明日はどうしても出社するよ」

賢と梓が、鶯谷の駅に降りたのは9時過ぎだった。もう人通りも少ない。北口から出ると、ふたりは裏道や歓楽街を避け、人の多く通る言問通に出て梓のアパートに向かった。鉄道を越える辺りで言問通は道幅が狭くなり、人通りもまばらになってくる。梓はまだ恐怖心から冷めていなかった。何時もこの道を通る時、この道幅が狭くなる辺りから、多少不安を覚えていたが、自分を励まして通り抜けてきた。今日は賢に肩を抱かれるようにして歩いている。まるで恋人に守られて歩いているような心地ができて、恐怖心が薄れるようだった。梓にとっては初めての経験だった。アパートに着くと、梓は賢に是非寄って行って欲しいと頼んだ。賢は梓の恐怖心が和らぐまで、暫らくの間梓の近くに居てやろうと思った。ドアを開けると梓は入り口の棧に脚を引っ掛けて、前のめりに倒れそうになった。ざらめを入れたので口当たりが良くなり、紹興酒を呑み過ぎたようだ。足元がふらついたのだ。咄嗟に賢が背後から梓の肩を抱えた。梓は身体を起こしながら向きを変えた。目の前に賢の顔がある。「ありがとう」梓は小さな声でそう言うと、恥ずかしそうに顔を逸らせた。梓は照明を点けると、小走りで部屋の中に入って行った。賢は入り口のドアをロックして部屋の奥に入ると、エアコンのスイッチを入れ、ソファに腰を降ろした。梓はそのままキッチンでコーヒーを用意している。

「梓、明日は会社には僕が伝えておくから。仕事はメールでやり取りしよう。まだ油断できないから、明日は外に出るときは気を付けてな」

「はい、リーダー」

梓はそう応えながら、コーヒーを持って来て、賢の前と一人懸けのソファの前に置いて、そこに腰掛けた。

「リーダー、わたくし、本当はそんなに強くないんです。あんなに怖い思いをしたのは生まれて初めてです。あれからのわたくしは何時ものわたくしじゃなくなっていました。あそこの言問通の道が狭くなるところ、夜はあまり好きじゃないんです。それでも、今までは大丈夫と自分に気合を入れて帰っていましたけど、今日は、もしリーダーが居てくれなかったら、怖くて通れなかったと思います。だけどタクシーも怖いし……」

「一緒に来てよかった。もう、一人で居ても大丈夫だよな？」

その時、トントントンと3回ドアをノックする音がした。二人は顔を見合わせた。もう10時を回っている。梓は立って賢の横に来て言った。

「リーダー、一緒に来てください」

すると、また、3回ノックする音がした。

賢はドアの近くまで梓の後に附いて行った。梓がドアに向かって言った。

「どなたですか？」

「宅配便です」

若い男の声だった。梓を後ろに後退(さが)らせて、賢がドアを開けた。まだ20歳前後の若い青年だった。賢はその青年を意識で観た。若いエネルギー意外に攻撃的なものは感じない。

「宅配便です。昼間お留守でしたので」

「それはお手数をお掛けしました。ご苦労様」

「こちらにサインをお願いします」

賢は「田辺」と書き込んで、荷物を受け取った。30センチメートル角ほどのダンボールだ。かなり重たい。青年は「ありがとうございました」と言って立ち去った。賢は再びドアをロックすると梓に荷物を見せた。梓は送り状を覗き込みながら言った。

「わたくし、この小田原の浜崎と言う人、知りません。小田原には知り合いもいませんし」

賢は、段ボール箱の中身に意識を集中してみた。少し嫌な感じがする。梓を確認を取って段ボール箱を床に置くと、封印テープを剥がし梱包を解いた。中には「極上献上茶セット」という緑色地に黒字で印刷されたB6版程度の用紙と、6本の茶のペットボトルが入っていた。

「何かしら」

梓がペットボトルに触れようとした時、賢がその手を掴んで言った。

「梓、触っちゃ駄目だ。毒かもしれない。このお茶には嫌なイメージが感じられる。僕が持ち帰るよ。明日、警察に届ける。……梓、そろそろ、帰るよ。君を一人残して帰るのは心配だけど」

「リーダー、あの一……わたくし、とっても怖くて……」

その時、外に救急車のサイレンの音が聞こえて来た。梓は体をドアから隠すように賢の後ろに隠れた。

「リーダー、わたくし、狙われているのかしら」

「よし、今夜は僕と一緒に居てあげる。明日、会社と一緒に出勤しよう。それなら、梓も安心していただけるだろう。僕も梓のことを心配しなくて済むしね」

賢は亜希子に電話を掛けて事情を説明した。亜希子はくれぐれも気を付けるように言った。愛子のことは自分に任せて欲しいと言った。梓は極端に神経質になっていた。洗面台、浴室、ベッドの下などを賢を伴ってチェックして廻った。特に変わった様子は無い。賢は梓からガムテープを貰い、ペットボトルの入った箱を再び封印してからドアの外に出して、ドアをロックした。梓は賢にシャワーを浴びるように言った。しかし、一人で居ることへの恐怖心が募って来た。賢は梓の意識に、非常に不安定なものを感じた。賢はドアにチェーンを掛け、梓と共に、2つの窓のロックを確認した。それから、シャワーを借りることにした。梓はクローゼットからハンドタオルとバスタオルを出して来て、脱居場所に居る賢に渡した。賢が衣類を脱ぎ始めても梓は、賢に背を向けてそこに立っている。賢は、梓が本当に怯えているのを理解した。シャワールームの壁は薄いピンク色だった。梓は部屋の装飾には意識的に暖色系を避けている。梓にしては女性っぽい色だと賢は感じた。急いでシャワーを浴び

て出て来ると、梓が洗面台のシンクの前にしゃがみ込んでいた。吐いた様だ。袖口が汚物で汚れ、シンクに汚物が詰まっている。賢は急いで体を拭いて、タオルを腰に巻き付けた。自分がシャワーを使っている間、梓がトイレに入れずにそこで苦しんでいたことを知った。賢は梓に近付き、背中をそっと摩った。梓は苦しそうだった。賢はタオル掛けに掛かっている黄色いタオルを取り、汚れないように注意しながら温水を出して、少しタオルに含ませ、梓の口元を拭いてあげた。掌も嘔吐物で汚れていた。賢はタオルのきれいな部分を探しながら、梓の汚れている部分を順に拭って行った。一通り拭い終わると、ぐったりしている梓を抱き起こして、上着を脱がせ、黄色いタオルと一緒に、洗濯機に放り込んでから、梓をベッドに連れて行って横に寝かせた。それから賢は戻って来てバスルームに入り、トイレの便器の蓋を開けてから再びシンクに戻り両手で梓の吐き出した汚物を掬い、便器に流した。それを3度ほど繰り返した。甘酸っぱいような、気分の悪くなる臭いがあたり立ち込めていた。水道を流し、シンクの汚れを落とすと、賢は自分の手をきれいに洗ってから、バスタブに湯を張る為に底の栓を締め、浴室の給湯蛇口を開いてから、衣類を身に付けた。キッチンでグラスに白湯を一杯注いで、それを持ち、梓の寝ているベッドに行った。梓は涙ぐんでいた。

「リーダー、済みませんでした。わたくしお酒を呑み過ぎたみたいです」
「そんなに呑んでなかったじゃないか。多分、緊張と恐怖の所為だよ。今日は僕が近くに居て守っていてあげるから、安心して、心を開放した方がいいよ。怖いものなんて何にも無いよ。みんな自分の想念が作り出しているんだから。この白湯を飲んで、胃を洗った方がいい」
梓は白湯を、ゆっくり3回に分けて呑んだ。呑んでからコップをベッドサイドに置いて言った。

「リーダーって、優しいんですね。誰に対してもこんなに優しいのですか？」

「僕は、特別優しくしているなんて意識はこれっぽっちも無いよ。苦しんでいたら、こうするのが普通じゃないかな・・・それより、体が冷えていて、内臓が十分に働いていないようだから、お風呂に入った方が

いいよ。一寸待って、お湯が溜まったかどうか見て来るから」

そう言うと、賢はバスルームに向かった。賢が立ち去ると、梓はクローゼットに行き、下着とパジャマを出して脱衣場所に向かった。シンクが綺麗になっている。自分の上着と、自分を拭ってくれたタオルが洗濯機の中に放り込まれていた。賢はバスタブに向かって湯加減を調節している。梓は賢が恋しくなった。今まで男性にこれほど優しくされたことは無かった。梓は胸が熱くなって来て、バスルームに入ると、賢の背中に自分の頭を当てて言った。

「リーダー、こんなに優しくしないでください。わたし・・・・・・・・」
賢は、給湯の蛇口を閉めると、梓の方に向き直って、梓の頭を自分の胸に抱き締めた。

「梓、君が居てくれたから、僕は自分に戻れたんだ。君が苦しいときは僕も苦しいんだ。だから、そんなこと言うな・・・早く風呂に入って、体を温めろよ。いいな、ゆっくり入るんだぞ」

梓は、賢の胸の中で頷いた。涙が頬を伝わって流れた。梓は涙を流したのを覚られないように、下を向きながら賢から離れた。賢はバスルームを出ると、ソファのところに戻った。梓が用意してくれた毛布と枕がソファに置かれている。賢は毛布を避けて腰掛けた。それから瞑想状態に入った。暫らくすると早瀬由美からテレパシーが届いた。

「どこにいらっしゃるのですか？あなた、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。心配を掛けたな。鉄筋が落ちて来たんだ。明日、警察に届け出る」

賢は自分が梓の部屋にいることは伝えなかったが、由美がそれを知ることが容易なことは分かっている。賢は由美の意思に任せることにした。由美は賢の眼を使って、賢のいる場所を覗こうとはしなかった。

「あなた、くれぐれも気を付けてね」

「ありがとう。おやすみ」

「おやすみなさい」

由美との交信は相手を完全に信じ切ったものだった。由美の意識には常に賢が存在していたので、もうそれ以上何も必要なかった。

梓は湯から上がると、ソファのところに来て賢の横に腰掛けた。

「梓、気分はどうだ？」

「はい、リーダー、もう大丈夫です。リーダーのおっしゃるとおり、体が温まったら、心も温まったみたいです。恐怖心も薄れました」

「そうなんだ。心身一如。梓も心の悪足掻きを退けられたな」

「はい、少しずつリーダーの話されることが分かってきました。心を開放するってことの意味も、意識の重要なことも、少し分るようになってきました」

「ひとは、真実・意識・至福という3つの相を一体化させて、自分自身を全体に溶解させること、そういう生き方を目指すべきなんだ。全体との恋愛、全体との至福に満ちた合一だ。そのとき自分自身は無くなる。つまり、自我が消えるんだ。自我が無くなると、恐怖などは掻き消えてしまう。すると、自分自身の実態が永遠だということを知る。その結果、全ての不安や憂いが消えて、完全に安らぐ。そのときに、本来の自分自身に立ち返っているんだ。今度のプロジェクトで目指しているのは、この状態を多くの人に経験してもらって、自分自身が何者なのかを知ってもらい、現象の世界、その中でも特に物質に捕らわれない人間になってもらうことなんだ」

「わたくしは、目を瞑ってもいろいろのことを考えてしまって、到底無我の境地にはなれそうもありません」

「皆そうだよ。まあ、気長にやっていこう」

「はい、リーダー、わたくしはどこまでも、リーダーに附いてゆきます」
翌日、目を覚ますと、梓が食パンとコーヒーを用意していた。賢は、身辺を片付けて、顔を洗った。ふたりが軽く朝食を済ますと、梓はテレビを点けてニュース番組にチャンネルを合わせた。なにやら事件が起きたようだった。ふたりはニュースに見入った。2件の事故のニュースだった。1件は列車事故だった。新橋駅に進入して来た地下鉄の電車に人が跳ねられた。雑踏の中で線路に落ちたようだった。被害者の名前を聞いて、二人は戦慄を覚えた。一昨日高輪の会合に出席していたシステムプロジェクトリーダーの澤岸という男だった。もう1件は殺人事件のよう

だった。中目黒の路地裏で倒れていたのを通行人が発見した。服毒による死亡で、他殺と認定されていた。その名前を聞いてふたりは再び驚愕した。その被害者も大友という財務省でMIプロジェクトを担当している次官だったのだ。キャスターはどこで毒を盛られたのか分らないと説明している。ふたりが国家プロジェクトの関係者だということは説明に無かった。

「リーダー、恐ろしいですね。やはり、昨日は狙われたのですね」

「どうやら、そのようだな。僕が狙われたのは分ったけど、どうして、梓のところまで、変な荷物を送り付けてよこしたのかだ。それが分らない」

「リーダーがわたくしのアパートに寄ることは、誰にも分らなかったはずです。あまりにもタイミングが合い過ぎているし、やはり、わたくしも狙われたのでしょうか？」

「それは何とも言えない。……兎に角、会社に寄る前に警察に届け出よう。これはあからさまなプロジェクトに対する攻撃だ」

その時携帯が鳴った。数馬からだった。数馬は興奮していた。「これはプロジェクトに対する挑戦だ」と言った。数馬はまた後で連絡すると行って電話を切った。

警察では6本のペットボトルを直ぐに鑑識に渡すと言った。鉄筋の落下については、既に通行人と工事会社から報告が入っていた。誰も事故に巻き込まれなかったのが、偶発事故として処理される場所だったと言われた。直ぐに報告を欲しかったと、担当の警察官から非難めいた口調で言われた。賢が事情を説明した。

「昨日は、自分たちが誰かに狙われていると感じ、身の安全を第1に考え、自分の家に潜んでいました」

警察官も納得したが、昨日発生している2つの事故から見ても、賢を狙ったものだろうと警察官は言った。ふたりは一旦会議室に通され、そこで詳細の説明をさせられた。引率の警察官以外に3人の警察官が事情聴取に同席した。賢はそれだけこの事故が重大視されているということを知った。警察官は賢の何故梓の家に泊まったのかという説明に対しては、

少し怪訝な顔を見せたが、それでも一応納得をした。やがて6本のペットボトルの内容物の検査結果が会議室にもたらされた。賢が感じたとおり、やはり6本の内、2本に10ml飲んだだけで死に至るだけの砒素が入っていたとのことだった。最年長の警察官は、「しかし、犯人は何故砒素を2本にだけしか入れなかったのかが、腑に落ちない」と言った。ふたりは1時間遅れて出社した。出社すると直ぐに社長の藤代肇から呼び出しが掛かった。社長室には賢と梓のほかにも楠木も同行した。楠木も少なからず怯えていた。賢は祐子の失踪以来、藤代には会っていなかった。賢が避けていたのではなく、藤代がほとんど不在だったのだ。藤代はビジネスライクに話をした。祐子のことには微塵も触れなかった。

「おはようございます」

3人は声を掛けて社長室に入った

「内観君、無事でよかった。昨日は楠木君と田辺君も一緒だったのか？」藤代は何時になく、3人の姿を見ると直ぐに話し掛けた。賢が応えた。

「いいえ、危険な目に遭遇したのは僕と田辺だけです。昨日は概略仕様を受理されたので楠木と田辺の部下をつれて新橋で軽い打ち上げをやりました。若い者と楠木が2次会に行くと言うので、僕は田辺と帰途に着きました。その後で工事現場の横を通り過ぎようとしたとき頭上から鉄筋が落ちて来たのです」

「それは危なかったな。だけど、よく避けることができたな」

「はい、直感で危ないと思いました。直ぐに田辺の手を取って車道に飛び出して、一命を取り留めました。それから、田辺に付き添って、田辺のアパートまで行き、そこに居る時に宅急便で田辺宛に毒物の入ったペットボトル6本が届けられました。危ないと思いましたので、手を付けずにそのまま今朝警察に届けて来ました」

「うーむ。どうやら、狙われているようだな。内観さん、二人と一緒に、攻撃を仕掛けてくる可能性のある組織や個人をリストアップしてくれないか」

3人はプロジェクトルームに戻ると、早速検討会を開いた。ステアリングチームにも声を掛けたが、出席したのは常務の笹塚だけだった。

「一体どういうことだね。内観君、誰の仕業か予想はできないのかね」
「はい、常務、全く予測できません。1昨日5プロジェクトのリーダーの会合がありまして、そこでスケジュールのすり合わせがありましたが、5社の間に敵対的な関係になりうる要素は全くありませんでした。個人的にも皆さん紳士でした。今日お亡くなりになった澤岸氏も、非常に穏やかな方でした。先ほど、社長からも可能性のある組織や個人名をリストアップするように言われましたが、今のところ皆目見当も付きません」
「当社では、今回の鉄筋落下、毒物宅配とそれに社長令嬢の誘拐事件が起きている。今日は、他の4プロジェクトの関係者に連絡して、今度の2つの事故以外に何か別の出来事が起きていないか確認してみてください。このような異常な事件が起きているのだから、ただ事じゃない」
「僕は、今度の事件はある種の警告じゃないかと思います。どうも唯の恨みじゃないような気がします」

「うん、わたしもそう思う。何かの組織がMIプロジェクト全体を阻止しようとしているのかもしれない」

会議は30分ほどで終えた。賢は田辺に頼んで4プロジェクトの窓口にメールで連絡を入れ、何か攻撃を受けているかを確認した。運用プロジェクト以外は、何らかの心当たりがあるようだった。特に財務プロジェクトを担当した大日本ファイナンシャルグループは詳細な説明は無かったが、大口の顧客が取引の中止を申し入れてきていると言っていた。システムプロジェクトを担当したWS T社は社内がパニック状態になっていると言ってきた。本社のメインフレームに2度サイバー攻撃を受けたと言った。幸い最近強化したファイヤーウォールで防御できたが、危ないところだったとのことだった。賢は数馬に電話を入れた。数馬の会社には特に攻撃は仕掛けられていなかった。システムプロジェクト傘下のサブプロジェクトまでは攻撃の対象になっていないようだった。企画プロジェクトを担当した穂妻総合企画研究グループはプロジェクトリーダーとサブリーダーの自宅に昨夜不審な郵便物が届けられていた。いずれも現在警察に届け出ているとのことだった。賢と楠木、梓の3人はそれらの内容を纏めた。楠木が言った。

「やるのがすこし派手すぎると思いませんか？妨害以外の何か、別の意図を感じます」

「別の意図と言うと？」

賢は楠木の言わんとすることが分らなかった。

「はい、僕は、犯人は何か特定の人か、組織か、システムか、そういうものを攻撃しようとしているのだけど、気付かれないように焦点をぼやけさせようとしているように思えるんです」

「それにしても手が込んでいるな。もしそうだとすると、その犯人は気付かれることを意図していたのかもしれないな」

田辺が言った。

「わたくしもリーダーと同じ意見です。同時にこんな攻撃を仕掛ければ、誰でも、明らかにMIプロジェクトを狙っている攻撃だと考えますが、その次には楠木さんのおっしゃるようなことが想定されます。しかしそのことを明らかにさせて、その結果起きる反応を狙ったんじゃないかと思えます」

楠木が言った。

「田辺さん、どういうこと？」

「たとえば、もしこの攻撃が、わたくしを狙ったものだったとします。・・・ありえないかもしれませんが、喩えですよ。・・・そうすると、わたくしは自主防衛を考えて、自由に行動できなくなる。会社もわたくしの行動に対して、警戒心を持つようになる。結果としてわたくしは仕事ができなくなる。そうすると会社は当然わたくしをプロジェクトから外して、更に組織を強化しようとするでしょう。そのことによってわたくしは孤立化してしまいます。これで攻撃した者の意図は達成されるのではないのでしょうか。もちろんわたくしへの直接の攻撃が成功すればそれは犯人の思う壺でしょう」

「なるほど、そういうことも考えられますね。リーダーと田辺さん読みが深いですね。もし、そうだとすると、一体誰に対して攻撃が行われているのでしょうか？」

賢が言った。

「少なくとも当社の中では、僕に対する攻撃だと思いますよ」
一瞬3人は沈黙した。賢はあらゆる条件を考えてみると、自分に対する攻撃が仕掛けられていることが明白だと感じた。賢の大切にしている祐子と田辺への攻撃も、自分に対する間接的で陰湿な攻撃だと思わざるを得なかった。これ以上自分の大切な人たちに攻撃が行われるのを黙って見ているわけにはいかないと考えた。賢は亜希子と愛子のことを考えた。何とか保護する必要があると思った。何故これほどまでに苦しい状態に陥ってゆくのか不思議だった。自分の中にこのような状態を引き寄せる要素があると認めざるを得なかった。

その日から賢は、梓は言うに及ばず、亜希子や愛子に対しても、暫らくの間、夜間の外出を控えるように言った。どうしても夜間外に出る必要がある時はタクシーを使うように言った。梓については、暫らくの間、就業後毎日家まで送ることに決めた。予想したように、それによって賢の業務処理の効率は落ちた。落ちたとは言っても、もともと人の何倍も早い処理速度で業務をこなしていたので、傍目にはそれほど効率が落ちているようには見えなかった。

それから1ヶ月が経過したが、依然として祐子の消息は得られなかった。システムプロジェクトのリーダー澤岸と財務次官大友を殺害した犯人についても、捜査は進んでいなかった。しかし、それら事件の後、1ヶ月間は何事も起きなかった。いよいよ企画、インフラ、システムの3プロジェクトのすり合わせの時期がきた。ここで整合が取れると3社はマイルストーン・スケジュールの確立に着手することになっていた。概略仕様とスケジュールが確立すれば、次は詳細仕様の策定の段階に移る。詳細仕様策定には半年は掛かると3社はみなしていた。数馬の結婚式の日取りも1月先に迫っていた。4月末の土曜の夕方、賢、数馬、亮子、亜希子の4人は何時ものファミレスに集まった。4人とも定食を頼んだ。「数馬、いよいよだな。亮子、新居の仕度は整ったのか？ちょっと最近の報告をし合おうか」

「賢、そう急ぐな、先ず飯を食おうぜ。ねえ、亜希子さん」

「はい、わたくしもその方がいいと思いますわ。・・・お話を始めたら、

多分お食事はいただけなくなって……」

亜希子が涙ぐんだのを見て3人は直ぐに覚った。

「そうだな、先ず飯だ。今日の定食は……えーと」

「牡蠣フライとエビフライの盛り合わせ、それにシチュウよ。わたくしもシチュウは得意なのよ。今度ご馳走するわね」

メニューを見ながら、亮子はその場の雰囲気明るくしようとして、快活な声で言った。

「温かい家庭で新妻亮子の手作り料理か。天国だな」

「おい、あまり冷やかすなよ、賢。お前だって……」

数馬の一言で、また皆黙り込んでしまった。亜希子が目に一杯涙を貯めて下を向いてしまった。ハンドバッグからハンカチを取り出すと、両目を拭ってから言った。

「わたくし、結婚式でテレサテンの「時の流れに身をまかせ」を歌います。祐子お姉さまの大好きな歌……わたくしに歌わせてください」

亜希子は再びハンカチで目頭を押さえた。亮子が言った。

「わたくしたちばかりこんなに幸せでいいのかしら。祐子さんが今苦しんでいると思うと胸が張り裂けそうよ」

「祐子がいなくなってから、この集まりも火が消えたようになってしまったな。祐子は太陽みたいだったからな。祐子は居てくれるだけでよかった」

数馬も打ち沈んだ顔になった。賢が天井に顔を向けて言った。

「祐子は無事で居る。説明はできないけど、それはわかる。だけど、最近の祐子は今までの祐子とは違う。今までは俺の横に祐子が居ると感じていたんだが、今は俺が祐子の懐に抱かれているような感覚を感じる。きっと、この1ヶ月で祐子の身に何か大きな変化があったんだ。もちろん危険な状態にあることに変わりはないだろうが……」

台湾

祐子に乗せたタクシーは1軒の鉄筋コンクリート3階建てのビルの前に横付けされた。祐子はタクシーを降りるときに手を引っ張られる衝撃で、意識を自分に戻した。しかし、虚ろな状態を装ったまま行動した。祐子に続いて、春子が引き降ろされた。春子は依然として意識朦朧としていて、やすの腕に抱えられている。祐子も親分の腕に自分を委ねた。祐子は薄目を開けて自分たちが連れ込まれてゆくビルの入り口を見た。入り口には何も書かれていない。中に入ると異臭が充満していた。親分が言った。

「相変わらず臭せえな。この腐った豆腐の臭いは」

祐子は「臭豆腐だ」と思った。そこは台湾の奥地らしかった。

親分は祐子と春子をやすに託すと、奥のほうに入って行って鉄の扉を開けた。中から中国人と思われる50歳前後の男が顔を出した。二人はひそひそと話していたが、親分がポケットから札束を出し、そこから何枚かの紙幣を男に渡した。男は2度頷いて鉄の扉を閉めた。親分は戻って来るとやすに鍵を渡しながらか言った。

「やす、201と202号室だ。飯は届けさせることにした。おめえはシャブ漬けの方を可愛がってやれ、201号室だ。いいな、あれを使えよ。傷物にするな」

「へえ、分かってやす。やっと思息が吐けるってもんでやんす。親分、ごっつあんです」

「あした、8時にハマに飛ぶ。いいな、寝過ごすなよ。奴等、しくじらなきゃ、あの辺りに来るはずだ。トラ、持ってるだろうな」

「へい、親分1キロは飛びやす」

「やす、おめえ、シャブ漬けを負ぶってやれ、いいな。おれは姉さんを抱えて上がる」

やすは春子を背負った。親分が手を貸して、しゃがんでいるやすの背に春子に乗せるのを手伝った。やすは何とか春子を背負って階段を登って行った。親分は祐子を両腕で抱え上げた。祐子はぐったりしたままの体を装った。祐子は「悪人もここまで来ると、力も知恵もあるんだ。悪知恵とあの人の叡智と戦わせたら面白いだろうな」と考えた。負けたほうの

目の周りに黒丸を描く……」そんなことを考えていると、とたんに可笑しくなって来た。

「わっはっはっはっはっはっは……」

祐子の声は響き渡った。二人は驚嘆した。やすは春子を落とすまいと踏ん張ったが、階段から足を踏み外して、3、4段ずり落ちて腹ばいになった。春子はやすの上に乗ったままきよろきよろしている。春子の意識が戻ったようだった。親分は驚いたが、そのままの姿勢を保ち続けた。

「姉さん、驚かさないでくださいよ。おい、やす大丈夫か？」

「お、親分、びっくりしやした。一寸、脚を打ちやしたが、でえじょうぶでやす」

やすは春子を負ぶったまま階段に両手を突いて立ち上がり、手摺を頼りに何とか2階まで登り切った。親分も祐子を抱きかかえたまま階段を登り切った。登り切ると二人は、女性たちを降ろした。部屋は階段を登り切った直ぐ左手の2部屋だった。やすはドアノブに鍵を刺して廻し、ドアを引くと、春子の手を引いて201号室に入って行った。やすが中に入って扉を閉めると、親分はそっと祐子の手を引いて202号室の前まで行き、部屋の鍵を開けようとして鍵をノブに差し込んだが、鍵が回らなかった。いくら回そうとしても回らない。

「くそ、なんて旅館だ」

親分はドアを蹴飛ばした。しかし依然として鍵は回らなかった。親分は苛立ってきたと見えて、祐子の手を乱暴に引くと、201号室に行って、ドアノブを回わそうとした。鍵が掛かっている。親分はドアを足で2度蹴った。大きな音が響き渡った。ドアが少し開いてチェーン越しにやすの顔が見えた。

「おい、やす、下に行って、鍵を替えてもらって来い」

「へ、へい」

やすがチェーンを外すと、親分は祐子の手を引いて201号室に入った。やすはパンツ一枚で上半身は裸だった。祐子は賢に助けを求め、感情を封印した。部屋は意外と広く、ダブルベッドがひとつと、テーブル、ソファが置いてある。ベッドの奥に全裸にさせられて体を丸めて小さく

なっている春子が居た。怯えて震えている。

「やす、おめえは手が早ええな。夜は長げえのに」

「親分、丁度楽しもうと思ったところでやんす。どうしたんでやんすか？」

「やす、下に行って202の鍵が壊れているって言って来い。この鍵を持って行け。他の部屋に替えろと言え」

「分りやんした」

やすが出てゆくと、親分は春子の方に近付こうとした。祐子が間に入った。

「親分さん、あの子具合が悪いみたいですよ。女だから分るんですよ」

「なんだ、姉さん意識が戻ってるじゃねえか。いつ戻った」

「今ですよ。わたしは可哀想な人を見ると意識が戻るんですよ。わたしにこの子の様子を見させてください。この子狂っちゃいますよ。震え方が尋常じゃない」

「姉さん、あんたも初心（うぶ）だな、こいつはシャブが切れたから、震えが来てるんだよ。後であんたにもシャブ打ってやるから待ってな。頭ん中が花火みたいになって、いい気持ちになるぜ」

「わたしはそんなもんいらぬよ。どっちみち自分を切り離すからね。何されたって分らないんですよ。とにかく、その子を慰めさせてくださいよ」

「まあ、勝手に慰めな。俺はその後で楽しませてもらうから、具合よくしてやってくれよ。折角だからお互い気持ちよくならなきゃな。なあ、そうだろう」

祐子は黙って春子に近付いた。全裸で背中を丸めてうずくまっている春子の背中をそっと撫でて言った。

「あなた、春子さんって言ったわね。いい、よく聞くのよ。生き抜くのよ。いい？ここは、自分の感覚と感情を捨てるの、そうするのよ。何も感じないって思いなさい。されるときは腸に内視鏡を入れられていると思いなさい。暫らく苦しいけど、直ぐに終わるわ。おっぱいを吸われたら、可哀想な他所（よそ）の赤ちゃんにおっぱい上げているって思いな

さい。何も感じないわ。どこを触られても感じなくなるのよ。いい。わたしが3つ数えたら感じなくなるわ、いいわね。1、2、3 はい。我慢するんじゃなくて、感じないのよ」

そう言うと春子の震えは少し収まった。

「お姉さん、一緒に居て。わたくし怖い」

「分ったわ。やってみる」

祐子は春子の背中に毛布を掛けてから、奥のソファに座ってタバコをふかしている親分に向かって言った。

「親分、今日はここで4人過ごしたらどうですか？部屋代も浮くし、それに4人で居た方が何かといいと思うんだけど」

「おお、それもいいな。両方とも楽しめるしな。よし、そうしよう。そっちのシャブ漬けの姉ちゃんは元気になったかね」

「親分さん、シャブ漬けなんていっちゃ駄目ですよ。女は名前で呼ばれたほうが嬉しいんですよ。この子は春子って名前があるんですから」

「そんなこたあ、分かってる。よし、姉さんの言うことを聞くか。今度は春子って呼ぶよ。なあ、春子よ」

「はい」

春子が返事をした。親分はきまり悪そうだった。そこにやすが帰って来た。

「親分、いい部屋は無い様なんです。この二つしか。今からドアを直すって言ってます」

「ばっきゃろう、悠長なこと言いやがって。やす、今日はここに4人で泊まる。おめえはソファで寝ろ。おれが姉さんたち二人の面倒を見てやる。ベッドもひとつしかねえからな。おめえは下に行って、ひとつキャンセルだと言って来い」

「へ、へい、でも親分、あっしは一人で寝るんですか？」

「まあ、がつつするな、おめえには別に楽しみをやる。今夜はこれで遊んで来い」

そう言うと親分は札束から3枚の紙幣を抜き出してやすに渡した。今夜は帰って来なくてもいいぞ。あした7時に下に来ている」

「へい、分りやした」

やすは紙幣をポケットにねじ込むと、ニヤニヤしながら、扉を開けて出て行った。親分が祐子の近くに来て、ベッドの縁に座った。祐子の右手を取ると、祐子を引き寄せていきなり口づけした。祐子は一瞬で、意識を切り離した。親分が自分の顔の周りを舐め回っているのが分る。くすぐったさすら感じなかった。何かが口の中に押し入れられた。暫らく口の中で動いていたが、のどの奥を強く押されるように感じて来てから、間もなく出て行った。親分の手が自分の乳房を掴んでいるのが分った。乳首に何か食らいついたのが分ったが、何も感じない。親分は自分の服を脱がしに掛かったようである。祐子は力なくだらっとしていた。親分は祐子を全裸にし、ベッドに横たえた。春子が祐子をじっと見つめている。祐子には春子の視線が見えた。親分は自分の衣服を脱ぎ捨てて、祐子の中に入ろうとした。祐子は何も感じない。親分は少々苛ついてきた。中に入ることができなかった。祐子の見ている自分の体は自分とは関係のない物体だった。祐子は目を瞑った。暫らく瞑目していると、親分の怒鳴り声で意識が戻った。

「おめえ、不感症か？えっ？つまらねえ。それなら、そっちの姉さん、春子、こっちに来い。可愛がってやる」

祐子は春子と眼が合った時ウインクをした。春子も、祐子の真似をしようとした。しかし、親分の指と舌の動きに、遂に体を開いてしまった。やがて、春子は親分の背中に手を回し、嗚咽を発し始めた。親分も感極まって果てた。

「おめえはなかなかいいな。いい物持ってる。姉さんとは大違いだ。まあ、今夜はもう一回楽しもうな春子。姉さんは後でシャブを打ってやるから、楽しみにしてな。そうすりゃ、抱かれたくなるってもんよ」

それから親分はタバコに火を点けた。春子はまだ動けなかった。暫らくすると部屋をノックする音がした。親分は二人の女性にシーツの中に潜っているように言うと、バスローブを身に着け、ドアのところに行った。宅配のピザ屋だった。親分は無言で札を1枚取り出し、ピザ屋に渡し、ピザ2枚とペットボトル4本を受け取った。ピザ屋は「シェシェ」と言

って去った。

「姉さん方、腹減ったろう、ピザを食おうか」

そう言いながら、親分はピザをソファの前のテーブルの上に置いた。

「さあ、こっちに来な。そのままでもいいから」

二人はベッドの中から出ようとしなかった。祐子が言った。

「親分さん、シャワーを使ってもいいですか？このままじゃ食べられませんよ」

「春子もそうか？」

「はい」

「春子は可愛いな。よしよし、二人ともシャワーを浴びたら直ぐに来いよ。バスローブがあるから。姉さんはそれを着ていな。春子はそのままでいいから、タオルを巻いておいで」

二人はバスルームに行き、一緒にシャワーを浴びる様な素振りをした。シャワーの湯を春子の体に掛けながら、祐子が言った。

「逃げよう、いいわね！」

「はい、お姉さんに附いて行きます」

「あなた、感じちゃったの？」

「いいえ、振りをしただけです。演技上手でしょ。わたし、演劇部だったの」

「そう、わたしはてっきり・・・今度、あなたの上にあいつが乗っているとき、わたしが、そう、あいつの頭をハンガーで殴るから、あなたは、さっきみたいに、あいつにしがみついて、放しちゃちゃ駄目よ」

「分ったわ」

二人は交互に背中を流した。備え付けのシャンプーを使って髪も洗った。全身をくまなく洗った。祐子は口の中も粘膜が剥げるほど強く洗った。洗い終わると祐子は体をタオルで拭いてから、ハンガーからバスローブを外して着た。春子はバスタオルを胸の上から巻き附けた。そうして、親分の所に戻った。親分は既にピザを食べ始めていた。祐子は何気なくハンガーをベッドの上に放り投げた。

「どうだ、さっぱりしたか？」

「親分、わたし、恥ずかしいけど、感じちゃった。絶対大丈夫だと思ったのに……」

「ばか、俺のテクニックにかなう奴はそうはいねえ。そっちの姉さんぐれえのもんだ、何の反応も無えのはな。……春子、一寸こっちに来てや。俺の横に座れ。ほれ、このピザ結構いい味してる。ほれ、口を開けてみろ」

春子が親分の隣に腰掛けると、親分はピザの一切れを持って、尖った端を春子の口に持っていった。春子はそれを少し齧った。

「親分、ありがとう」

春子は媚を売るように、流し目で親分を見つめた。親分は春子の肩を抱き寄せて、タオルをずり降ろした。春子のピンク色になった二つの乳房が露になった。親分は春子の乳房に手を掛け、乳首を摘んだ。

「お、親分、感じちゃいます。親分、ああ……」

祐子は、春子の演技を見て知らん振りを決め込み、ピザをひと齧りした。腹ごしらえをしておこうと思った。親分はまたその気になった。春子を正面から抱きかかえるようにしてベッドに連れて行った。春子は身悶えするような、動きをしながら後ずさりして、ベッドに仰向けに倒れ込んだ。それからふたりは暫らくの間絡み合っていたが、やがて親分は春子の両足を上に広げて、自分の体をその間に押し込んだ。やっと親分の興奮が高まって来たと祐子は思った。食べ掛けのピザをパックに戻し、静かに立ち上がった。春子は頭を起こして、親分の肩を抱き寄せた。親分が激しく動き始めた。春子はうめき声を上げた。親分の動きが一層激しくなった。祐子はハンガーを持って、親分の背後に迫り、ベッドに静かに乗ると、思い切りハンガーを振り下ろした。

「ガキツ！」

「いたっ！」

親分の声と同時に春子は思い切り親分の肩を抱き寄せた。親分が体を起こそうとしても、春子は齧りついて離れなかった。祐子は続けてハンガーを振り下ろした。思い切り振り下ろした。3回、4回、……7回目ですぐに親分は気を失った。春子は親分の体を押し退けて、木偶と化し

た肉体の下から抜け出した。祐子は急いで、自分のバスローブのひもを抜き取りだらしなく力の抜けた親分の両手を背中に廻して縛り上げた。春子はバスローブの紐で足を縛った。思い切り力を込めて縛った。祐子は無言で着替えをした。祐子は親分のポケットから有り金を全て抜き取った。そうしておいて、うつ伏せになっている親分に背後からハンドタオルで猿轡を噛ませた。春子は急いで洗面所に行くともう一度、体の隅々までシャワーを掛けて洗った。春子のシャワーが済むと、祐子は親分の脱いだ洋服と靴をバスルームに持って行き、水浸しになるまでシャワーの水を掛けた。春子は衣類を身に付け、靴を履いた。それから残りのピザ4切れを敷き紙に包んで手にした。ふたりは部屋から忍び出てドアをロックした。外は思いのほか寒かった。ふたりは音を立てないようにして階段を降りた。幸い誰も居なかった。ふたりがビルの外に出ると、既に夜の帳が降りていて、このビルのある一角の外はほとんど真っ暗だった。今出て来たビルと、その周辺に4棟の平屋の建物が確認できるだけだ。ビルに沿って歩いていると、やがて眼が暗やみに慣れてきて、道路とそのはるか遠方にいくつかの光が見え隠れしている。祐子が鍵を草むらに投げ捨ててから言った。

「さて、これからが面白いわね」

「お姉さん、どうしたらいいんでしょう？」

「暫らくは黙って歩くのよ。いいわね。わたしたちは此処に住んでいる人の目には強盗犯に映るはずよ。そうでなくても、どの道捕まったらおしまいね。まあ、その時は死ねばいいのよ。あんただって、一度は覚悟を決めているでしょう。死のうと思えば何も怖くないわよ。全て捨てなさい」

「お姉さん、このピザも捨てるんですか？」

祐子は可笑しくなって、大笑いをしたかったが、両手で口を押さえて笑いを堪えた。

「ばかね、喩えよ、喩え。無我って謂うでしょ。自分を捨てなさいって言ったのよ。ピザは後で食べるんでしょう」

祐子は逃げ出して来たビルからできるだけ遠くに逃れたかった。あのビ

ルも親分と繋がりがあるはずだと思った。危険だった。歩きながら祐子は祈った。

「神様、わたくしに道をお示してください。このまま生きる必要があるのなら、正しく生きられる道をお与えください。ここで死すべきでしたら、適切な場をお与えください。お預かりしたこの体をお返しいたします」暫らく行くと道は2手に分かれ、一方は今来た道の延長で遠方に明かりの見える幅4メートルほどの通、他方は道幅が主道の半分ほどで、遠方が暗闇で見通しのきかない道だった。祐子は遠くに明かりの見える主道を選んだ。その道のずっと先に何軒かの家々があるように見える。そこで救いを求めようと思った。もうひとつの狭いほうの道の先には、明かりの点いていない平屋の家が見えたような気がした。それに賭けようかとも思ったが、その道の右側には灌木が茂っている。左側は背丈の低い雑草で覆われていて、見るからに危険そうだ。

「春子さん、広い方の道を行きましょう」

「はい」

それから10分ほど歩いた。行く手の明かりは、一向に明るさを増してこない。

「お姉さん、向こうから誰か来ます」

「いいわね、普通にしているのよ。ニコニコして歩くのよ」

ふたりは初めて自分たちの服装に意識がいった。祐子は下着の上に薄手のセーターを着、その上に通勤時に着るスーツを身に着けていて、紺のスカートを履いている。タイツを履いているのでそれほど寒くは感じない。春子はオレンジ色の花柄のある明るいばら色のワンピースの上に白いブラウスを身に着けていた。黒いパンティストッキングを履いている。やはり、それほど寒さを感じなかった。他人が見ても異様に感じるはずは無かった。遠方から近付いてきた人影は、接近すると高齢な夫婦だということが分った。暗さの所為もあつてか、身に着けているものは地味な感じの衣類で、女は茶色のオーバーコート、男性は疲れたジャンパーを着ている。あまり裕福な生活をしているようには思えなかった。すれ違いざまに二人はちらりと祐子達の方を見たが、そのまま行き過ぎた。

祐子は、その視線に戦慄を覚えた。「しまった」と思った。地元の者に自分たちの存在を知られてしまった。急がなくてはならないと思った。二人連れの姿が見えなくなってから祐子が言った。

「さっきの暗い道に戻るわよ。地元の人たちに見られちゃったからね」
「お姉さんに附いてゆきます。わたし、怖くなんかない」

祐子は、春子が暗闇を恐れているのだと思った。

「春子さん、生まれて来る時は真っ暗闇なのよ。死ぬときも同じ。眼で見ちゃ駄目よ、心で観なくちゃ。わたしたちは生きるのよ。明るい未来に向かって真っ直ぐに生きるの。必ず道は開けるから」

暫らく今来た道に戻り、分岐路まで辿り着くと、ふたりは暗い道に向けて歩き始めた。月の無い夜だった。星も半分は雲で隠れているようで、ほとんど闇の中だ。ふたりは光の無い道を恐る恐る歩いた。さっき道の先に見えたと思った家の影は見当たらなかった。何も無い道をかれこれ2時間ほど歩いた。やがて右手に崩れかかったブロック塀が現われた。塀の裂け目から、眼を凝らして中を覗くとそこには今にも倒れそうな廃屋が2棟並んで建っているようだった。その時、春子がガタガタと震えだした。

「お、お姉さん、あ、頭が痛い。あ、あ、息が苦しい……」

祐子は麻薬が切れてきた時の症状だと覚った。周囲の条件は今までとそれほど変わらないはずだが、恐怖心が、体の危険信号に敏感に反応し始めたようだった。祐子は春子の身体に手を回して抱き締めた。

「春子さん、心配しなくても大丈夫よ。気を楽に持ちなさい。苦しいけど、心を開放するのよ。少し我慢するのよ。きっと乗り越えられる。もう、わたしたちは死んでいるのよ」

祐子は震えている春子を抱きかかえながら、ブロック塀の端から回り込んだ。塀の裏は廃屋の庭になっていて、中央に古井戸があった。祐子は古井戸の横にある岩の上に春子を腰掛けさせた。祐子は春子の頭を、自分の胸に抱き締めた。

「春子さん、安心してね。きっと、この家がわたしたちを救ってくれるわ」

祐子は春子がしっかりと握り締めていたピザの敷き紙を開き、ピザを一切れ取って春子に食べさせた。春子は咽せながらそれを頬張った。たべものを口にして、少し落ち着いてきたようだった。

「お姉さん、ありがとうございます。少し楽になりました。あの、薬の所為だと思います。わたし、耐えてみせます」

少し休んでから、ふたりは左側の廃屋に近付いた。人の住んでいる気配は感じられなかった。古びた木のドアがある。この家の入り口のような。祐子がドアをノックした。鈍い音がした。何の応答も無い。もう一度叩いてみた。やはり何の反応も無い。祐子はドアを引こうとした。ドアはびくともしなかった。祐子がもう一度ドアを叩こうとしたとき、微かにガタガタという物音がした。それはこの家の中からではないようだった。ふたりは暫らく耳を澄ませていたが、何も聞こえてこなかった。ふたりは恐る恐る、右側にあるもう一軒の家の方に行ってみた。その時、コトコトと小さな音がした。明らかに右側の家の中からしたようだ。辺りは真っ暗で、家から漏れる光の影もない。ふたりはドアに近付いた。祐子はドアを軽くノックしてみた。応答は無い。少し間を置いて、もう一度ノックしてみた。中からガタと音がして、やっと聞き取れる声で応答があった。

「シェイ（誰）？」

「助けてください。追われています」

そう言ってから、祐子は、ここが外国であることを思い起こした。

「シェイ（誰）？」

春子がドアに近付いて、言った。

「ジウミンア！（救命啊）」

祐子が春子の耳元で囁いた。

「何て言ったの？」

春子も囁き声で言った。

「多分、「たすけて」だと思います。横須賀で船に載せられた中国人が叫んでいました」

木のドアが少し開いた。ふたりは背筋が冷たくなった。

「シェンツァイ（現在） イーティエン（一点） チョン（鐘）、ニーメン（你們） ツォン（从） ナール（哪儿） ライ（来）」

50歳くらいの女性がドアの隙間から顔を見せて言った。何て言われたか分らなかったが、祐子は多分「どこから来たか」と訊いているんだろうと思った。無駄だとは思ったが、できるだけゆっくり話した。

「わたしたちは、日本人です。誘拐されてここに連れて来られましたが、すきをみて逃げ出したのです。助けてください」

奥のほうから、ぼそぼそ話す低い声が聞こえてきた。もともと中国語は分からない上に、低音で囁れた小声だったので、ふたりはただ他にも人がいると感じただけだった。

「チンチン（請進）、・・・チン（請）」

女はドアを開けて中に入るように手招きした。祐子は頭を下げてから女の手招きに従った。春子も恐る恐る祐子の後に附いて入り口を潜って中に入った。奥には、天井から暗い電球がひとつだけ吊り下げられていて、何とか部屋の中の様子が確認できた。そこはでこぼこのある土間だったが、そこから直ぐに板張りの部屋が続いているようだった。異臭が鼻を突く。雰囲気慣れてきてふたりには中の様子がはっきり見えてきた。女はぼろを身に付けていて、髪も乱れている。痩せていて目だけがぎよろぎよろと目立つ顔立ちだった。異臭を放っているのは、女のようなようだった。さっき声のした板張りの奥の方で、人の咳き込む音が聞こえた。咳に続いて喘息のような息遣いが聞こえる。女は床の部屋に上がるようにふたりを手招きした。ふたりは、上がり口に腰を掛けて靴を脱ぐと、女の後附いて板の間の部屋に上がった。板の間も板が剥れて穴の開いている場所があり、ふたりは薄暗い中を精一杯注意して進んだ。少し先に筵のような敷物があり、その上に誰かが横になっているようだ。眼を凝らしてみると老人が筵の上に体を横にして寝ていて、ふたりの方を見ている。頭は枕に乗せている。初めは何も掛けていないように見えたが、よく観ると体には薄い毛布が一枚掛けられている。その老人が口を開いた。

「あ、・・・あなたは・・・ゴホゴホ・・・にほんの・・・ひとですか？」

あなた、ひかっています。ゴホゴホゴホ」

つかえつかえだが、確かに日本語だ。ふたりは胸躍った。祐子が応えた。

「はい、わたしたちは、日本人です」

「わたし、・・・にほんことば、ゴホゴホゴホ・・・すこしはなせます。

せんそう・・・おぼえました。ゴホゴホゴホゴホ」

祐子と春子は老人の近くに行って腰を降ろした。むせるような体臭が鼻を突く。春子は袖口で鼻を押さえた。祐子が老人に顔を近付けて言った。

「悪い奴に誘拐されて、どこかに売られそうなところを逃げ出して来ました。今夜、ここに泊めてくださいますか？」

「いいです。・・・だけど、たべもの・・・なにもない。・・・ゴホゴホ」

老人は苦しそうに呼吸をしている。

「ゴホゴホ、あなた、ひかっている。あかるい」

「どこか具合が悪いのですか？」

「わたし、・・・もうすこし死にます。・・・あとはむすめ・・・しんばい。ゴホゴホゴホ。それ、むすめ」

娘がふたりのところに、縁の欠けた小さな湯飲みを2つ持って来た。身なりは乞食のようで、臭いも酷かったが、優しい物腰だった。

「ニーメン（你們） チンチン（請請） ホオチャ（喝茶）」

娘はチャを祐子と春子の前に夫々ひとつずつ置いた。二人は同時に言った。

「シェシェ（謝々）」

「ナァリ（哪里）ナァリ（哪里）」

娘はにっこり笑った。頬はこけていて眼だけが異様に目立つが、初め50歳ほどに見えた顔も、今見ると40歳そこそこのようだ。春子が紙包みからピザを2切れ出して娘に渡した。娘は嬉しそうに言った。

「シェシェ（謝々） ニン（您）、シェシェ（謝々） シェシェ（謝々）」

老人が言った。

「あなた、むすめ、つれてにげてください。ゴホゴホゴホ。ゴミひろってせいかつ、むすめかわいそう。・・・わたしは、ゴホゴホゴホ、・・・

もうさかなとれない。ふねで、にげて・・・ください。ゴホゴホ」
祐子が言った。

「お茶、ありがとうございました。わたしたちは危険な組織に追われています。一緒に逃げては危険です。このお金で病院に行ってください。そして、洋服や食べ物を手に入れてください。いいですか、できるだけ綺麗な服を着て、お金は少しずつ使うのですよ。一度に使うと疑われますからね。いいですね。少しずつ使うのですよ」

そう言うと祐子はポケットから、さっき親分から奪い取った札束から2枚の札を抜き取ってそれを春子に渡し、残りを全て床の上に力なく広げている老人の掌に乗せ、指を曲げて握らせた。

「いいですか、決して一度に使ってははいけませんよ。今の話を娘さんに言って、それから体を洗うので、お湯を沸かすように言ってください」
老人が娘を呼んで少し話をした。娘はその場で祐子に向かって平伏し、頭を床に摩り付けて礼を言った。

「ニンメン（您們） フェイチャンウエンロウダニューズ（非常溫柔的女子）、ガンシェブジン（感謝不尽）」

娘は直ぐに土間に下り、隅の方に行き鍋に水を汲んだ。水は大きな桶に貯めてある様だった。桶の中に柄杓を入れ、水を掬った。それを鍋に移し、カセット式のコンロの上に載せた。コンロは足が一本折れていて、そこに小石を挟んで使っている、一見壊れているんじゃないかと思われるカセット式の小型コンロだったが、火を点けるとちゃんと点いた。それから娘は一度床の上に上がり、奥に行き隅の箱の中から、ビニール袋に入ったまだ封を切っていないハンドタオルを大事そうに持って来て、祐子に渡した。

「チン シャオチエ（請 小姐）」

明らかにそれは大切に取って置いたものようだった。部屋の中は暗かったが、娘の微笑がはっきり分った。祐子は手で自分のスーツの襟を掴んで小さく振って言った。

「一番いい服と下着を持って来てください」

老人が、フォローした。

「ワン・ファン（王芳）、タイ（帯）ニーシンイフー（你新衣服）ト
ウン（同）ニーテーシェンイフー（你貼身衣服）ライ（来）」

「ドエ（対）」

ワン・ファンと呼ばれた娘は元気よく返事をして、先ほどの箱の中から、綺麗に畳んだ、白っぽい服と下着を持って来た。白っぽい服は自分の一張羅のようだった。それを大切に祐子に渡した。祐子はそれを頷きながら受け取ると、ワン・ファンの背に軽く触れて、促すようにして、下着とタオルを手にし土間に下りた。ワン・ファンも附いて来た。春子はどうなることかと床の上がり口に腰掛けて足を土間の側に下ろして見ていた。祐子はワン・ファンと共に、湯の沸き掛かった鍋の近くに行くと、コンロの火を消す真似をした。それを見てワン・ファンが火を消した。祐子は両手で50センチくらいの円を形作ってファン・ファンに示した。ワンファンは直ぐに理解した。でこぼこの洗面器を持って来て、床に置いた。ワン・ファンは鍋の湯を洗面器に移した。祐子はビニールの袋を破ってタオルを取り出すと、タオルの端を摘んでゆっくり洗面器の中に入れた。湯はそれほど熱くはなかった。祐子はタオルを絞ると、ワン・ファンの方を向いてタオルを広げ、ワン・ファンの顔を優しく拭いた。ワン・ファンはじっとしている。タオルを裏返しにして、髪を拭いた。何度も何度も拭いて、またタオルを湯に着け、絞って、また拭いた。ワン・ファンの顔が、暗闇の中でも、見る見る綺麗になってきたのが分った。もう一度タオルを濯ぐと、祐子はワン・ファンのぼろのブラウスを脱がせた。異臭がさっと祐子の鼻を襲った。祐子は何も感じない。ワン・ファンは男物の長袖シャツを着ていた。祐子はそれも脱がせた。流石にワン・ファンは恥ずかしそうにした。しかし、あまりにも泰然としている祐子に対しては、抵抗を示すこともできず、ただ黙って下を向いていた。祐子は裸になったワン・ファンの上半身を拭いた。何度もタオルを濯いで、背中も前も綺麗に拭いた。それから、祐子は下半身に附いている衣類を脱ぐように、ジェスチャーで示した。ワン・ファンは黙って従った。どうしていいのかわからないまま祐子の命令に従っているようだった。祐子はタオルをワン・ファンに渡した。ワン・ファンは自分で

タオルを濯ぎながら体を拭いた。拭き終わったタオルを濯いでから、絞ってそれをコンロの横に置いた。ワン・ファンは全裸で呆然と立っていた。祐子は先ほどの下着を手にとって、ワン・ファンに渡した。ワン・ファンはそれを受け取っても暫し呆然としていたが、祐子に促されて、おそろおそろそれを身に付けた。パンツとスリッパを身に付けると、祐子は先ほどの新しい衣服を着るようにジェスチャーで示した。頭からワンピースを潜らせると、そこに別人のワン・ファンが居た。眼に涙を一杯貯めている。まるで生まれて初めて新品の洋服を着たような清々しい笑顔だった。

「あなた、明日から綺麗にしていなさい。毎日綺麗にいなさい。少しずつ綺麗になってくるって思うのよ。生活が良くなってくるって思うのよ。今のあなたはとっても綺麗よ。いいわね。あのお金で、少しずつ衣類を買うのよ。少しずつよ。一度に買ってはだめよ」

涙を流しながら、ワン・ファンが頷いた。春子は「分ったのかしら？」と思った。祐子は洗面器の湯を古びた流し台に流し、柄杓で大桶から新しい水を汲んで鍋に注いだ。ワン・ファンは黙ってそれを祐子から受け取り、コンロに掛けて火を点けた。次に祐子がしようとしていることはワン・ファンにも春子にも分った。ワン・ファンはタオルを手にとると部屋に上がって奥の隅に行き、また下着を持って父親のところに来た。それは父親の下着の様だった。先ほど濯いだタオルを持っている。間もなく湯が沸いてきた。祐子はコンロの火を消し、その湯を洗面器に移すと、老人の近くに持って行った。祐子が何も言わないのに、ワン・ファンが父親の上半身の衣服を脱がせ、体を拭き始めた。何度もタオルを濯いで体を拭った。父親は初め何度か咳をしていたが、拭き終える頃には呼吸も静かになってきた。父親は唯、目を瞑っているだけだった。自分で体を動かすことはできないようだった。体を拭き終わると、ワン・ファンは新しい下着を父親に着せた。ワン・ファンが洗面器を片付けていると、外にパトカーと思われるサイレンの音がして通り過ぎてゆくのが分った。父親が眼を開けて祐子を見つめて言った。

「あなたは、女神様。あなた、光ってる。ワン・ファン、わたくしの舟

に連れてゆく。その舟でにげてください。あなた、女神様、あなたたち、たすかる。かならず」

「ありがとうございます。わたしたちがホテルから逃げたこと、気付かれたのかもしれませんが。わたしたちは直ぐにここから出ます。あなた方はわたしたちのことを知らないと言いつけてください」

祐子は、老人の手に握っている札束を枕の下に隠すように促してから、春子に言った。

「春子さん、いいわね。わたしたちはもう、死んでいるのよ。何も怖いものはないのよ。だからあなたも精一杯生き抜くのよ」

「わっはっはっはっはっはっは・・・矛盾している。・・・わっはっはっはっは」

ワン・ファンも老人も度肝を抜かれた。春子はまた始まったと思った。老人が半身を起こそうとしている。祐子は駆け寄ってそれを支えた。老人の眼に涙が溢れていた。

「どうか、生きてください」

老人が上になっている右手を差し出した。祐子はその手をしっかり握り締めた。

老人の釣り舟は小さな手漕ぎのボートだった。廃屋の裏手が灌木の藪になっていて、ワン・ファンの後に附いて、笹を掻き分けながら細い道を進むと、前方に漆黒の闇が広がっている場所に出た。わずかに頬に触れる風に乗って、魚のにおいを感じられる。海岸に近いことが分る。廃屋のあったのは小高い丘の上のようだった。藪の中をかれこれ20分ほど歩いて来た。ワン・ファンにとっては勝手知った道のような道だった。暗がりをバサバサと笹を掻き分けて躊躇せずに進んでいった。祐子はワン・ファンの後を必死に追った。春子は暗さに怯えながら、祐子のスーツの裾をしっかりと握り締めて、頭を下げに進んだ。天空の星が祐子達の救いだった。星の光だけでも周りの雰囲気があると分るということを、祐子は初めて知った。天空に星の光があっても、前方には漆黒の闇が広がっていた。しかし、よく眼を凝らすと天空の星が地に落ちて揺れている。前方一帯が海であることに気が附いた。ワン・ファンは砂浜にふたりを誘導した。

波の音は全く聞こえない。静かな夜だ。ワン・ファンは砂浜に裏返してある艇身4メートルほどの一艘のボートに近付いた。それから、その縁を握ってボートをひっくり返そうとした。祐子と春子も手伝って、ワン・ツースリーで漸くひっくり返すことができた。ボートの中には櫓が2本括り付けられている。3人は海に向かってボートを押した。なかなか進まない。必死に押した。10分ほど掛かって漸く船首が水辺に届いた。波は音を立てずに砂浜を濡らしていた。3人は押す手を休めた。祐子がワン・ファンに近付き、抱き締めた。ワン・ファンは涙を流した。

「ウォー（我） ワン・ファン（王芳）、ニン（您） ナ（呢）？」

「わたしは 祐子 こっちは 春子」

「ユーコ、ハルコ、ウォーヨンブークワイ（我永不会）ワンジー（忘記）ニン（您）イーピアンウォンジン（一片温情）シファーシェン（似乎神）ウォーチュー ニンメン イールー ピーン（我祝您們一路平安）」（祐子さん、春子さん、神様のようにあなたのことは忘れません。あなた方のご無事をお祈りしています）

祐子は靴とストッキングを脱いでボートに入れた。再び3人で呼吸を合わせてボートを押して、初めに春子に乗せてから、祐子とワン・ファンが更に押した。祐子は水の中に入ってボートが波に浮かんでからボートに飛び乗った。ふたりは必死に櫓で海底の砂利を押し、ボートを前に進めた。ボートが海に出た。ワン・ファンが左手で涙を拭きながら右手を振った。

「ユーコー．．．．ハルコー．．．．」

「ワン・ファン、美しくなってね！毎日美しくなるのよ！毎日幸せになってゆくよ！」

祐子は思い切り手を振った。春子も手を振った。ふたりは並んで座った。体を密着させていることで、春子の不安感が和らぐと祐子は思った。海は真っ暗な世界だった。自分たちが生まれてきた世界だ。そして消えてゆく世界のようにも見える。既にワン・ファンの姿は捉えることができない。前も後ろも右も左も真っ暗で、微かに星の光が水面に映っている。それが水先案内のようにふたりには思われた。

「祐子お姉さん、ワン・ファンさんはお姉さんの妹みたいだったわね。歳は随分離れているようなのに。わたし、祐子お姉さんがお母さんみたいに思えてきちゃった」

春子の眼に涙が光った。祐子は春子の方にゆっくり体を向けると、春子を抱き締めた。春子は祐子の腕の中で声を出して泣いた。

「春子さん、凄くない。わたしたち、海に出れたのよ。やがて日は昇るわ。何時までも闇の中じゃないのよ」

ここはどこなんだろう。あれからもう35日が経過している。ワン・ファンと分かれた次の日の昼近くになって大型貨物船に助け上げられた時、「これで助かった」と思った。春子がポケットから紙幣を出して渡そうとしたが、乗組員たちはそれを受け取らなかった。ふたりは一生懸命に日本語で話し掛けてみたが全く通じなかった。祐子は英語を使って同じように話し掛けたが、乗組員たちは両肩を上げて分らないというジェスチャーをした。乗組員たちの顔は浅黒く、目がギョロツとしていて、比較的彫りが深い。ふたりはこの船がインド国籍の船だと直感的に思った。乗組員の顔からだけでなく、話し声も、インド人を連想させた。祐子は乗組員の話している言葉はヒンズー語なのだろうかと思った。しかし、船に国旗の掲揚は無かった。祐子と春子は大切に扱われた。ふたりに一部屋があてがわれた。部屋にはシャワーが附いていて、バスローブまで用意されていた。2段ベッドやシャワー、トイレの他に3畳ほどの空間があり、ソファも置かれていた。ふたりは久し振りに体を綺麗にすることができた。夜は下着を洗濯して、バスローブで寝た。食事も船内には食堂があって、そこで3食きちんと出された。しばしばカレーやナンが出された。それもこの船がインドの船だと確信できる大きなポイントだった。船員たちは礼儀正しく、誰でもふたりを見掛けると会釈をした。しかし、船員たちが積極的にふたりに接近することは無かった。食事をしているときでも、ふたりに方に視線を向ける船員たちは無かった。祐子は時々、「この船には、女性も乗船しているのだろうか？」と思ってしまうことがあった。しかし1ヶ月ほどの間、女性の姿は一度も

目にしなかった。どうしても腑に落ちなかったのは、英語を話せる乗組員がいないことだった。もし、この船がインド国籍の船であれば、公用語の英語を話せる者が居るはずであるし、貨物船なので、荷物の受け渡しに英語を使うことが当然想定された。その上、船の各所に注意書きなどの英語での表記がされている。しかし、何度英語で話し掛けても、誰も理解できないようだった。途中でどこかの港に停泊した。丸1日停泊していたが、その時は乗組員の下船はない様だった。祐子はそこがどこか知りたかったが、あまり追求する気になれなかった。春子はそれでも、礼儀正しく扱ってもらえているので、安心して切っているようだった。祐子は、春子には自分の抱えている不審な感覚に附いて、何も話さなかった。折角精神が安定してきている春子の不安を掻き立てたくなかった。春子は日1日と症状が回復してきていて、やっとフラッシュバックなどの麻薬欠乏の影響から開放されてきているようだった。部屋でふたり切りになると、春子はよく話をした。

「わたしたち、どこに連れて行かれるのかしら？礼儀正しく扱われているけど、大丈夫かしら？とても心配。祐子お姉さん、わたしたち黙っていた方がいいのかしら」

「わたしはね、この船がわたしたちを助け上げた時、その運命を受け入れたのよ。この船の行き着く先が、わたしたちが次に迎える、人生の一場面を作っていくような気がするわ。春子さん、生きるのよ。常に心を安定に保つのよ。いいわね」

インド

あの段階で考えたことが現実になってきている。ここが一体どこなのか皆目見当も附かない。唯、きらびやかな衣装で飾られ、世界中から集められた30人ほどの女たちと一緒にハーレムのようなところに閉じ込められている。ここは城の様な場所に思える。毎晩、このハーレムには体の浅黒い、太った毛深い男がやって来る。その男の周りに女たちは寄り集まって、肩をもんだり指を弄ったりしている。ハーレムの中心には

大きな円形の浴槽があって、湯船には一面蘭の花が浮いている。その中にその男が浸かると、数人の女たちが一緒に入浴して、時々笑い声を立てている。夜が深まると、男はハーレムから一人の女を連れてどこかに消える。残された女たちは、暫らくしてからそこを出る。ハーレムを出ると廊下があり、その両側に2つずつ部屋への入り口の扉がある。その扉の向こうが女たちに与えられた空間である。部屋は8人部屋で、ベッドは2段ベッドである。そこは寝ることと化粧をすることの為にのみ使われている。浴室は部屋を出た廊下の突き当りの部屋にあり、4人が同時にシャワーを使えるようになっている。その右横がトイレで便器は4つ用意されている。更にその右手横に居室のようなハーレムより少し小さめの部屋があり、中は床が段違いになっていて、床一面に赤い絨毯が敷かれている。床の高くなっているところに女たちが腰掛けて休めるようになっている。テレビが置いてあるが、放映されているのはビデオ映像のみで、ニュースなどは流れていない。居室とシャワールームを隔てた反対側が食堂になっている。食事は朝と夕方近くの2回だけである。その日、男に選ばれると、別の部屋に入って夕食を共に摂る事ができる。全てはその男次第だった。美しい飾りを身に着けている女は、男に溺愛されている証のようだった。衣類は定期的に補給されているようだった。

ここに連れて来られる時、祐子は春子と引き離された。ふたりはまるで警察か、入国管理局のような役所に引き渡されたかのような印象を受けた。その印象ゆえに少々安心していた。その役所のようなところは英語が通じた。名前と国籍を聞かれた。しかし、身分証明書の提示を要求しないところから、祐子は覚悟を決めた。優しそうな事務の女性が祐子と春子を順に呼んだ。初めに祐子が呼ばれた。祐子は春子に会釈をした。春子も会釈を返した。それが春子との別れの瞬間だった。祐子は女性の後に附いて行った。会議室のような場所に通され、女性に英語で椅子に座るように促された。祐子が椅子に腰掛けると、女性が少し待つように言って部屋を出て行った。その後の記憶が無い。確か、空調機の音が聞こえていたように感じる。そこで意識を失っていた。気が付いたときに

はベッドの上に寝かされていて、今まで見たこともないような衣装を身に着けていた。一人の50歳ほどの女が来て、英語でいろいろ説明をした。その日から毎日ここで男を待つ生活が始まった。外に出ることが出来ないことが分ったのは、それから2日後のことだった。トイレに行こうと思ってドアを開けようとしたが、開かなかった。誤って隣の扉を開こうとしていたことに気付き、不審に感じて、人の気配の無い時に全ての扉を開けてみようとした。しかし、開く扉は限られていて、ここでの生活に使う扉以外の4つの扉は開かなかった。そのうちの一つは食事の前に女が料理を運んで来る時と後片付けの時、それから掃除婦が出入りするときにだけ開け閉めされていた。残りの3つの扉はどういう用途に使われているのかすら分らなかった。1週間が過ぎても、男は祐子に関心を示していないようだった。ハーレムに居る女は夫々に特徴のある顔立ちをしていたが、総じて美人でスタイルが良かった。日本人は居なかった。お互いに言葉を交わすことも無く、黙々と生きていた。祐子は感覚と感情を自分から取り除いた。もう、賢に助けを求めるのはやめた。全ての人たちへの愛の意識を抱いて生きようと決めた。ただ木偶のように思考の動きを止め、意識は駿馬の如く働かせる生き方に徹することにした。

この日も祐子はハーレムの隅でタイルの縁に腰掛けていた。ハーレムに男が入って来て、祐子の近くに came。男は祐子の前に右手を差し出した。祐子は何も反応しなかった。周囲にいた女たちが怪訝な顔で祐子を見た。男は祐子の右手を掴んで、床の上に作られた台座の上に座った。祐子も男の横に座らされた。祐子はただボーっとしていた。他の2、3人の女が寄って来て、男の手や足を摩ったり、肩をマッサージしたりした。男は祐子を抱き寄せた。祐子は反応しなかった。男はそこを立って浴槽に向かった。4、5人の女たちが男に附いて、一緒に浴槽に入った。祐子はそのまま、そこにすわったまま動かなかった。湯から上がると男は祐子の所に戻って来て左手を取り、そのままハーレムから出た。男が開かずの3つの扉のうちの一つ目の扉を引くと、扉は簡単に開いた。扉の向こうは寝室になっていた。王様の使うような金欄な屋根の附いたキング

サイズベッドが中央にあり、周囲には化粧台や、王朝風の家具が並べられている。右隅にはグランドピアノも置いてあった。

扉を開めると、男は祐子の手を引いてベッドの近くに行き、衣類を脱ぎ捨てて全裸になった。祐子は唯ボーっとして立っていた。男は祐子の衣類を乱暴に剥ぎ取った。祐子も全裸にさせられたが、それでも唯ボーっとして突っ立っていた。男は祐子の手を引っ張ってベッドの上に押し倒した。祐子は何の反応も示さない。男は祐子が媚びて来るのを待っているようだった。しかし、祐子は動かなかった。仕方なく、男は祐子の上に乗ってことを遂げようとしたが、どうしても上手く行かなかった。祐子は様々なことをさせられたが、全く反応しなかった。遂に男は怒りだした。衣類を身に着けると、ドアを勢いよく閉めて一人で寝室から出て行った。祐子は、半分引き千切られた衣類を身に着けた。祐子が部屋から出ようとする、ここに連れて来られたときに祐子にあれこれ説明をした50歳前後の女が、扉を開けて入って来た。女は祐子に近付くと、平手で祐子の頬を打った。女はヒステリックに祐子にまくし立てた。祐子が情を示さなかったことを非難しているようだった。祐子は唯、木偶のようにボーっとしていた。思考も、感覚も、感情も全くその機能を失っていた。女は祐子に新しい洋服を差し出して、ちゃんと対応するように厳しく叱った。祐子はその新しい服を手にして自分の部屋に戻った。7人の女たちが一斉に祐子に視線を向けた。祐子の部屋には一人英語を話す女が居た。その女が言った。

「Did you refuse him, didn't you. If so, you will be killed. Aren't you afraid of him? You'd better to be submissive to him.」(あなた、彼を拒否したのね。殺されちゃうわよ。彼のこと怖くないの？彼に服従した方がいいと思うわ。)

「No, I'm not. I've been already dead. I'm not afraid of anything at all. I'm free from everything. However, I love everybody, every people and all nature. Of course I love you too. I love all animals. I love all insects. I love all viruses. わっはっはっはっはっはっはっは」(いいえ、わたしはもう死んでるのよ。何も恐れないわ。完全に自由なの。わたし

はだれでも、全ての人々も、自然の全ても愛しているの。もちろん、あなた方も愛しているわ。全ての動物も愛している。全ての虫も愛している。全ての細菌も愛しているのよ)

女たちは、祐子が狂ったと思った。祐子は笑い続けた。

数馬と亮子の結婚式は盛大に行われた。数馬はタキシード、亮子は白のウェディングドレスに頭から白いベールを掛けていた。快晴で穏やかな日差しの日だった。150人の客が招待されていた。円卓が20卓並べられていた。仲人は数馬の会社の直属の事業部長夫妻だった。賢や亜希子の席は新郎新婦の正面の一番前の席だった。そのテーブルには亜希子、愛子、原智明、数馬の会社の社長、藤代肇、登紀子の6名が同席していた。仲人の挨拶の後に来賓の祝辞が済むと、賢が新郎・新婦の親友として代表で祝辞を述べ、乾杯の音頭を取った。

「新郎数馬さん、新婦亮子さん本日は誠におめでとうございます。ご両親ならびにご親族の皆様、心よりお慶び申し上げます。本日ご列席の皆様と共に、新郎新婦の栄えある門出の席に出席させていただきましたことを、心より感謝申し上げます。わたくしは新郎、新婦の親しい友達としておふたりをよく存じ上げている内観賢と申します。新郎新婦とこちらに同席させていただいています藤代亜希子さん、そして、本日は出席できませんでしたが、藤代祐子さんの5人は永遠の友として、誓い合った間柄であります。わたくしたちはこれからの世界が向かおうとしている方向をいち早く察知して、その先鞭を切って生きようと考えています。新郎数馬さんは、現代社会の仕組みを代表するエリートサラリーマンです。新郎の機知に富んだ行動は常に我々4人の崇敬の的です。新郎はこれからの日本を引っ張って行く存在として、その前途が洋々たるものと思います。そして新婦亮子さんは、誰もが認める心の優しい、今はほとんど目にするのできない、古の大和なでしこを絵に描いたような女性です。新婦は日本を代表する温かく、優しく、慈悲に富んだ家庭を築かれてゆくことと確信しております。こんなおふたりですから、日本一、いや、世界一の家庭が築かれるであろうことを、わたくしたちは確信し

ております。永遠の友、わたくし達3人からメッセージを述べさせていただきます。数馬さん、亮子さん、永久（とわ）の愛を誓ってください。自らのことは忘れて、相手のためだけに生きることを誓ってください。いつも、意識の奥に相手を抱いて生きて行っていただきたいと思います。本日は、本当におめでとうございます。それでは皆様、グラスをお手に、ご起立いただきたいと存じます。新郎新婦の栄えある前途と永久（とわ）の愛を祝して乾杯をしたいと思います……乾杯！」

「乾杯！」

亜希子も微笑を絶やすことは無かった。お色直して新婦亮子が退席した。賢はビール瓶を手にして新郎数馬の所に行った。

「おめでとう！これでお前も、いよいよ亭主になるわけだ。亮子さんを大切にしろよ。あまり仕事ばかりしていちや駄目だぞ。家庭を大切にしろよ。お前ならわかっているだろうけどな」

「ありがとう。これで俺も安心して仕事ができる。いい家庭を作って見せるよ。まあ見ているよ。きっと羨ましがらせて見せるから」

賢は仲人にも軽く挨拶し、数馬と亮子の両親の所に行き、祝福の言葉を述べてから自分の席に戻った。亮子がお色直しから戻って来て、出迎えに出た数馬と二人で、キャンドルサービスをして回った。賢たちのテーブルには最後に廻って来た。ふたりが席に戻ると、数馬の会社の先輩2人がスピーチをし、その後で亜希子の番になった。

「新郎数馬さん、新婦亮子さん、本日はおめでとうございます。ご両親の皆様、ご親族の皆様、心よりお喜び申し上げます。わたくしたち親友は、おふたりのご結婚を、ずっと待ち望んでおりました。本日は感動で胸が一杯です。わたくしはお話が上手ではありませんので、歌を歌わせていただきます。テレサテンの歌で、「時の流れに身を任せ」を歌わせていただきます。この歌は恋する女心を歌った歌です。精一杯歌います。「もしもあなたに あえずにいたら わたしはなにを してたでしょうか……」

亜希子は途中から涙声になったが、すすり上げながらも最後まで歌いとおした。賢も涙を流したが直ぐにハンカチで拭い、それが目立たないよ

うにした。司会者がフォローした。

「藤代様、この素晴らしい披露宴に感動され、大変熱のこもった歌をいただき、ありがとうございました。新郎新婦も大変感動されたことと思います」

司会者の言葉で、列席のものが新郎新婦のほうを見た。ふたりはハンカチを出して涙を拭いていた。その後、2組の出し物があり、次に愛子と原智明がペアで「トルコ舞踏」と題したダンスを披露した。賢も亜希子も何も聞かされていなかったの、いつ相談して、どこで練習したのか不思議に思った。それはボレロに合わせて踊る、非常に調和の取れた素晴らしいダンスだった。原智明が一定のテンポで回転しながら、手の上下を繰り返し、愛子がバレエのトーシューズで爪先立ちをし、原の周りを自転しながら回った。原の両手が下に降りたときに、愛子は何時にも原の正面か真後ろに居る。ふたりは見事に同期していた。踊り終えてから、原が一言言った。

「おふたりには、同期して生きて行っていただきたいと思います。相手と、そして宇宙のリズムと。本日はおめでとうございます」

司会者がふたりの舞踏を賞賛していた。列席者の拍手喝さいが何時までも続いていた。賢と亜希子も感動した。賢はふたりが席に戻ると、どこで練習したか聞いた。愛子が言った。

「秘密よ、賢パパ」

しかし、原が笑いながら言った。

「僕のアパートですよ。時々ね」

司会者が祝電の披露を始めた。数馬に対して、いろいろな会社から沢山の祝電が寄せられていた。亮子には無かった。司会者は最後の一通と言って、二人に暑いメッセージの祝電があると紹介した。

「オフタリノ カドデヲシュクシ ココロヨリ オヨロコビモウシア
ゲマス。コノヒガクルノヲ マチノゾンデイマシタ。シアワセニ ナツ
テクダサイ。エイエンニアイシアイ ムツミアッテ イキテクダサイ。
ワタシモ カナラズ イキヌキマス。 ユウコ」

亜希子が声を出して泣き崩れた。数馬も亮子も声を出して泣いた。愛子

も原も涙を流した。登紀子もハンカチを取り出して目を覆った。藤代肇は唇を噛み締めて下を向いてしまった。司会者は何が起きたのか分らなかった。それでもその場を繕うように話し始めた。

「ユウコさんとおっしゃる方は、新郎、新婦そして、ご友人の方々にとって掛け替えの無い方々の方です。そのような大切な方から、とても温かいメッセージをいただき、皆さん、感激されておられます。……いよいよ披露宴もクライマックスになろうとしています……」

・・・・・・・・・・・・・・・・

新婚旅行には明朝出発することになっていた。数馬と亮子は親友たちのために、2次会の席を用意してあった。式場の近くにあるフランス料理レストランの個室であった。愛子と原も招待された。長方形のテーブルだった。長手方向に新郎新婦、その向かいに愛子と原、両端に賢と亜希子が一人ずつ座った。数馬がシャンパンを頼んだ。ウェイターは直ぐに持って来て、全員のグラスに注いでいった。注ぎ終わると、賢がまた乾杯の音頭をとった。

「改めて、お祝いの乾杯をしましょう。ではふたりの前途を祝して……おめでとうございます！」

「おめでとうございます！」

全員心持ち、明るさに欠けていた。

「明日の朝は早いのか？」

「ううん、9時に出ればいいのよ」

「それじゃ、初夜は新居ということになるのか？」

亮子は真っ赤になった。

「賢、いじめるなよ。亮子が恥ずかしがってるじゃないか」

「おっと、それは、失礼」

「ところで、祐子はどうやって祝電を打ったのだろうか？」

数馬が賢に向かって言った。

「俺も、そのことを考えていた。もしかしたら、日本に連れ戻されているのかもしれないな……だけど、それは無いな。もしそうなら、祝電の前に、先ず俺たちに連絡してきているはずだ」

「バイロケーション、そんなことは祐子さんにはできませんしね」
原が言った。

「誘拐された祐子お姉さまに祝電を打てるはずはありませんわ」
亜希子がうつむき加減に言った。原は鋭い目つきに変わって言う。

「多分、予約祝電だと思います。あの人は、自分の運命を知っているんじゃないかと思います。誘拐される前に、既に予約祝電を打っていたんじゃないかと思うんです」

賢が言った。

「そうだね。それが一番可能性が高いな。祐子は東京に居て、時機を見て東領製作所に入社することを拒否して、急遽九州に行く道を選択した。そのこと自体が不自然なんだ。俺は時々、祐子が自分で選んで、そうしたようにさえ思えてくる。それは俺があまりにも優柔不断だったからかも知れないが・・・」

ウェイターが前菜を用意し始めた。数馬が話題を変えた。

「原さんと愛子さん、あのダンスとても素晴らしかった。よく息が合っていましたよ。あれは何のダンスですか？トルコとかいいましたね」

「あれはトルコの神秘主義者スーフィーのダンスをもじったものです。愛子さんの踊ったパートは、それにクラシックバレエをアレンジしたものです」

「素敵でした。ありがとうございました」

亮子も嬉しそうに言った。賢が冷やかすように言った。

「いつ、原さんのアパートで練習したんですか？ふたりきりで？」

原はさらっと応えた。

「愛子さんと練習日を決めたんですよ。1日30分、内観さんに外出を控えるように言われてから、レッスンの無い日には学校から直接僕のアパートに来てもらっていたんです。愛子さん、動きがとてもいいです。スーフィーのダンスは手足の動きが独立して意識されなくてはならないので、難しいんです。でも、愛子さんは簡単にマスターしました。素質があるんですね」

亜希子が言った。

「わたくし、愛子さんがバレエの練習日でもないのに少し遅くなるので、心配していたのですよ。それで納得できましたわ」

「あら、亜希子さん、そう言ってくれたらよかったのに」

愛子は平然と言った。皆、祐子のことに話を戻すのを躊躇した。そのレストランの食事は軽食だった。食事を終えると、「新郎新婦の夜の時間を奪ってはいけない」と言う賢の冷やかし半分の言葉で、皆早々に引き上げることに同意した。原は賢のマンションに寄った。4人で祐子の救出方法について相談をした。既に賢たちは実験で、ボールを大きくしたり、小さくしたりする意識の働かせ方をマスターしていた。賢は半月前に意識を作用させて、ボールを祐子に向けて発信していた。賢がボールに意識的な働き掛けを行った翌日、ボールは全員がマンションから出払って居る間に消えていた。クレジットカードと同じサイズの用紙にメッセージを書き込んで、ボールの表面に透明のテープで貼り付けた。「祐子、愛しているよ。自我を捨てて生き抜け。必ず助け出す。ボールに貼り付けた紙はボールが変化するとき同じ割合で拡大、縮小する。無心でないと剥せない。無機質の紙以外は何も張り付かない」

というメッセージだった。賢と原が最も苦心したのは、ボールを自分の意図したところに転送することだった。愛子を除いて3人は、ボールを自分のところに引き寄せることはできた。しかし、ボールはどうしても思うところに移動しなかった。半月前にやっとそれができるようになった。賢は直ぐに祐子に向けてボールを転送した。ボールは賢たちの前から姿を消したが、祐子の前に現われたかどうかは不明だったし、当然結果を確認する手段は無かった。ボールは送る側と受け取る側の意識が繋がっているとき、ボールを持っている方が送ることを意図すると、この時空間から消え、相手方がボールを意識した時にその相手の近くに現れることが分った。しかし、それは非常に難しいことのように思えた。祐子がボールを意識する可能性はほとんどゼロに等しい。しかし、賢はほんの僅かな可能性にでも賭けてみたかった。

「あのボール、祐子さんに届いたでしょうかね？」

原が言った。賢は淡々とした口調で言った。

「虐げられた場で、愉快的ボールのことが頭を過るようなら、祐子も大したものだ。でも、いずれは届くような気がするよ」

亜希子が言った。

「あなた、祐子お姉さまを救い出す手立てはありますか？」

「残念だが今のところ、全く思いつかない。この間言ったと思うけど、あの誘拐犯の子分達に2度面会をしたが、黙秘を続けていて何の情報も得られなかった。唯、次郎という男だけが、当局に対しては幾分口を割っているようだ。僕が面会したときも、祐子のことを、「あの人なら、絶対に生き抜ける」と言っていた。どうやら親分とはインドの海岸で落ち合うことになっていたようだけど、彼らは詳細を知らされていなかったようだ。その情報を元に、君のお父さんが台湾とインドの調査会社に捜索を委託しているが、現在までのところ全く消息は掴めていない。警察もお手上げのようだ」

愛子は天井から吊り下げてある、孤児院の園児たちが持って来た千羽鶴を手で手繰（たぐ）って放心したように見つめている。

「あと少ししたら、海外の視察に1ヶ月間くらい出張する。その時にはインドやアフリカも調査するつもりだ。そのときがひとつのチャンスにはなる」

亜希子が下を向いて言った。

「あなた、いつものあなたらしくないですわ。以前のあなたはもっと情熱的でした。考える前に行動していました。でも、今は、いろいろ考えて、慎重になりすぎているように思えます。非常に理性的で……」

亜希子が批判的なことを口にすることは滅多にない。賢は自分が本来の自分自身からかけ離れてしまっていることに気付いた。自分の最も大切な人すら救うことができずに、多くの人を導くことなど到底できるはずもないと思った。

「亜希子、ありがとう。僕は最も大切なものを見失っていた。愛だ。原さん、2、3日後から1ヶ月ほど愛子のことをお願いできませんか？僕は直ぐにインドに飛びます。表向きはインドの靈的聖域の調査ということにして祐子を探します。危険な旅になると思うけど、亜希子も連れて

ゆきます。いいね亜希子」

「はい、わたくしはあなたに附いて参ります。必ず祐子お姉さまを見つけ出して見せますわ」

「留守の間、僕は愛子さんをお守りします。任せておいてください」
原の言葉に、愛子が不満そうに言った。

「わたしもう子供じゃない。わたしも行きたい。賢パパ、連れて行ってくれるって言ったでしょう？学校休んじゃおうかな」

「愛子、遊びに行くんじゃないよ。祐子を探すんだから、凄く危険な旅になると思うんだ。おとなしく留守番していなさい。また、愛子の夏休みに合うように、2回目の調査をするから。その時は祐子も戻って来ていて、楽しい旅行になるはずだから……」

愛子はしぶしぶ納得した。原が言った。

「愛子さん、僕と一緒にあのボールを作りましょう。今度は愛子さんの言うことも聞くように作るんですよ。皆が居ない間に、完成させてしましましょう」

賢が驚いた。

「原さん、それ冗談じゃなく？ 本当に、できるんですか？」

「ええ、大体目処（めど）が立っています。一寸材料の入手が難しいんですけどね。バイオプラスチックを使うんですよ。ポイントはボール本体の伸縮性と意識を感知するセンサー部分の構造です。いかにS/N比を高められるかが勝負です。S/N比が100万を超えれば、フィルターの精度如何で人間の意識の変動を捕らえて電気信号に変換できると思います。最初は人間の意識を、その人間から離れた位置で受信できるかどうか確認する実験から始めます。模擬センサー回路とPCソフトを作って確認します。ここまでは、直ぐにできると思います。その後で、実際の受信信号をAD変換し、マトリクス演算を行って、試作回路上でシミュレートして、結果をPC上に表示させてみます。それからは、試行を繰り返して、誤り無く意識の種別を判断できるレベルに到達するまで精度を高めます。それができたら、ボールの中に組み込もうと考えているカラーLEDで色信号を表示するようにします。ここまですれば、

目的の80パーセントは完成です。次は拡大縮小ですが、受信した意識信号の強弱に従ってボールの中に仕組むコンプレッサーで内部気圧をコントロールするようにします。それでボールの拡大縮小をさせます。愛子さんがいろいろな意識を出す役で、僕が試作と実験を行う役でやってみたいんです」

愛子は乗ってきた。

「原さん、それ、面白そうじゃない。わたし、手伝ってやるわ。それに、飽きたらバレエの練習も一緒にできるしね」

「原さん、それは素晴らしい。是非完成させてください。出張から帰って、拝見させてもらうのが楽しみです」

亜希子は話が祐子のことから逸れてゆくのを寂しく感じていたが、賢はこれで安心して、インドに行けると思っていた。原が帰宅し、亜希子と愛子が入浴を済ませてベッドルームに去ると、賢は携帯で鹿島康介に電話を掛けた。

祐子が誘拐されることが判明してから直ぐに、康介に相談をしていた。しかし、康介は、まだ状況の把握ができていないので時間が掛かると言っていた。それから2ヶ月近く経っている。康介の鋭い推理力を借りようと考えた。康介は賢のインド行きの話を知ると直ぐに反応した。

「崎野さんのこと、俺も事件の連絡貰ってから、ずっと考えてきた。あん人だけはマジで助けたい。今回は俺の全てを賭けている。あん人を助けられなきゃ、俺、もう事件の調査止める。賢さん、いいすか。仕掛ける。敵を嵌める。いろいろ考えたけど、俺はそれしかないと思う」

「鹿島さん、仕掛けるって言ったって、相手がどこの誰だか分からないことにゃ、どうしようもないと思うんですが……」

「だから、仕掛ける。考えられるところにコマセを撒くんす。絶対引っ掛かってくるような、敵の大好きなコマセを撒くんすよ」

「つまり、罠（おとり）を使うと謂うことですか？」

「ノーノー、そんなこっちゃ敵は乗ってこない。テロ。爆破する」

「誰が？どこを？何の為に？・・・分らないな。鹿島さんの発想は」
「俺、インドの売春組織のリスト手に入れたんす。それと、人身売買の組織のリスト。買い手側のチョウ金持ちのリスト、そんな中でもハーレムを持つてる奴等のリスト」

「そんな情報をどこで手に入れたんですか？」

「わりいけど、そればっかは言えないっす。やばい組織からすよ。おれが喋ると、人が殺されるっす。俺も、今度は命を掛けてるっす。だから、完全に準備ができるまで、賢さんには連絡しないでいようと思っただけっす。けど、賢さんから連絡がきちゃったから、もうやるっきゃないっす」

「で、どうすればいいんですか？」

「賢さん、2千万円用意して欲しいっす。無理かな？」

「事と次第によっちゃ、僕も全てを掛けます。もう、掛けているんですけど、解決策が見えないんです。何も」

「だから、こっちから仕掛けるっす。外国人の女性を使っている売春宿とハーレムに仕掛けるんす。インドの大金持ちでも、ハーレムを持っている奴等は極悪人なんす。そのハーレムにも爆弾を仕掛けるんす。これは命掛けっす。同時にやるんす。5人がハーレムを持っていることになっているっす。可能性の高い売春宿2軒と、同じ日にやるんす。俺に情報をよこした奴も、その人身売買組織を根絶やしにしようと、ずっと計画してきたんす。もう、15年間隙を狙ってきたんす。爆弾仕掛ける役目を頼む奴等の目処も立っているっす。ヤバイ話だから、金が掛かるっす。それに、人を傷つけちゃまずいっすから、難しいんす」

「すると、爆破をして、その混乱に乗じて幽閉された女性を助けようということですか？」

「そんだけじゃ、崎野さんは助けられないっす。本命は、爆破の後でやることっす。運び屋っす。何人かは分かっているっす。そいつらを捕まえるんす。住んでるとこも分かっているっす。けど、あいつら、本当に危なくならなきゃ吐きませんから、あいつ等の存在を危なくさせるんす。こん時や、チョウ急いでやるっす。あいつ等が密告したことにさせ

るっす。そんなことがばれりゃ、命無いつすから、金と逃亡手段をやりゃ吐きます。崎野さんの居場所がわかったら、暴力団を使って、乗り込むんす。そん金が大体2000万円す」

「鹿島さん、明日会えますか？詳細の話をしたいので」

「いいすよ。明日上野に12時に行くっす」

「駅を出たところにある西郷さんの銅像の前で待ち合わせましょう。ぼくの携帯の番号分かってますね」

「OKす」

賢は鹿島の凄さに武者震いを感じた。鹿島と知り合っただけでよかったと思った。しかし、これだけの危険なことをどうやってやってのけるのか、詳細を聞くまでは、安心できなかった。

翌日、賢は楠木と梓に話して11時ごろ外出した。梓は賢の行動が腑に落ちなかった。何かあると感づいていた。賢は10分前に西郷隆盛の銅像の前に来た。梓は賢の後を追跡（つけ）た。銀座線の上野駅を降りたところで、待ち構えていた賢に捕まえられてしまった。

「梓、後を追跡（つけ）たな」

「リーダー、申し訳ありません。でも、何か危ないことだと感じましたから。わたくしに黙って行動するのは可笑しいと思いましたから」

「これから人に会うんだ。ふたりきりでなけりゃまずいんだ。梓、知らん振りして、俺たちの後を追跡（つけ）て来いよ。多分、レストランに入るけど、近くの席を選べるような空（す）いている店に入るから」
康介は12時5分過ぎに来た。背広にネクタイを締めている。賢は近くに来るまでそれが康介だとは気付かなかった。

「お待たせしました。待ちましたか？」

賢は「おやっ？」と思った。るっす調がなくなっている。何かの意図を感じて、賢もそ知らぬ顔で挨拶した。

「いいえ、今来たばかりです。食事はされましたか？」

「ええ、電車の中で、駅弁を食べて来ました。そちらは？」

「僕は、まだです。どこか、近くのレストランにでも入りましょうか。」

あまり混んでないレストランに」

ふたりは街中の繁華街を抜けて、路地裏のレストランに入った。中は意外と多くの席があったが、入り口の3席を除いて空席だった。3、4秒して、ふたりの外国人の男が賢たちに続いてレストランに入って来た。賢と鹿島は一番奥の隅の席を指定して座った。東京はテーブルが狭い。その直ぐ隣を1席空けて、外国人ふたりが座ったが、賢たちとの距離は3メートルもない。ウエイトレスが注文を聞きに来た。賢がさばの焼き魚定食を頼み、康介はコーヒーを頼んだ。ウエイトレスは外人の所にも寄った。二人の外人は片言の日本語で野菜コロッケ定食を頼んでいた。梓が入って来た。梓は知らん振りをして、賢たちのテーブルと外人のテーブルの間の席に着いた。賢たちのテーブルとは1メートルそこそこの距離しかない。ウエイトレスが来ると、梓もさばの焼き魚定食を頼んだ。賢は梓と好みが同じなのかと思って、笑いそうになったが堪えた。賢が口を切った。

「ところで、誰に頼むんですか？」

「現地の人です」

「あの国でこういうことを頼むのは、極めて難しいと聞いていますが」

「そうです。それを承知でやるのです。だから、はじめに5パー渡し、完了後95パー渡すという契約にしました」

梓は何の話をしているのか皆目見当が付かなかった。

「人が傷つくことはないでしょうね」

「もちろん、それが第1条件です。外の人も、中に居る他所（よそ）からの人も。全員が安全であることは確約されています」

「規模はどの程度になりますか？」

「そうですね、建物の半分位ですかね」

「日時は？」

「それは、これからですが、まあ、月曜日ですかね。午前10時くらいがいいでしょうね。あの辺りはその時間帯は人通りも無くて、建物の中の間もまだ休息中だと思いますから」

「一覧表は？」

「これです」

そういいながら、康介が2つ折りのA4用紙を開いて見せた。賢は二人の外国人の視線を強く感じた。

「同じ町なんですか」

「それが、2つの町なんです。そこに集中しているようです」

「対象は全部じゃないんでしょう」

「それは不可能です。主だったところ6箇所ですかね。タイプAを4箇所、タイプBを2箇所。それでも多すぎるほどだと思います」

「その後の段取りを教えていただけますか？」

「特別タクシーには事前にいらっしゃっていただきます。6箇所というのは、その特別タクシーの数なんです。そして、タイプA、Bのいずれかをそれぞれひとつずつ見学していただきます。後で感想もお聴きするんですよ。特別タクシーは提案を直ぐにお受け入れになると思います。同時に手足のちぎれた人形を2つくらいずつ倒して見せますからね。それからは、分り次第、すぐにあなたに連絡が入りますから。確認できたら、そのように仰っていただければ、大勢でそちらのお宅にお邪魔して、お宝を返していただきます。このところが、プロじゃないとできないんです。お値段も高いんですよ。1/3はこちらの費用です。そちらのお宅にもそういう役目の方が大勢おられると思いますからね。対応が難しいかと」

梓は何の話か、確かなことは分らなかったが、何処かを襲撃する計画であるらしいことは見抜いた。後で賢に確認しようと考えた。

「ところで、今日はどういうご予定ですか？」

「はい、お願いする方のところに寄ります。ご一緒していただけますか？」

「ええもちろん、喜んで」

そこまで話すと、二人のウエイトレスが定食を持って来た。定食は賢、梓、外人たちに同時に配膳された。それからは、賢は一言も話さずに食事に集中した。賢が食事を終えると康介が言った。梓は定食を半分ほど食べて箸を置いていた。

「お知り合いの方をお連れですか？」

「そちらは？」

「じゃ、お相子ですね。はっはっは」

賢は立ち上がると、鹿島に対し、右手で梓を示して言った。

「こちらは、僕の仕事のパートナー田辺梓さんです」

梓は突然紹介されて、慌てて頭を下げた。そして梓に対して、

「こちらは鹿島康介さん。僕の友人です」

と言った。鹿島も頭を下げた。康介は立ち上がると、賢に言った。

「あそこの二人の外人は、今度の実行責任者のブリクロン・アブリジさんとチダピオン・パジガリオさんです」

と紹介した。賢は軽く会釈した。康介は立ち上がると、二人の外人の近くに行って、賢を指差して言った。

「あれが、キーマンの内観賢さんです」

外人は唯賢を凝視しただけだった。鹿島は戻って来ると、やっと緊張が解けたといった風に言った。

「というわけで、これからは5人で話しましょう。彼らは品川に事務所を借りています。そちらに行って相談しましょう。その方が安全です」品川の埠頭の近くにある、7階建ての古いビルの3階の1室に賢と梓は案内された。梓は自分が何も把握しないで附いて来ていることにジレンマを感じたが、平然とした態度でいた。通された部屋は20畳くらいの部屋で会議用のテーブルと椅子が8脚置かれているほかは、隅に事務デスクが1つとロッカーが1個あるだけのシンプルな部屋だった。全員がテーブルの席に着くと賢と二人の外人は改めて挨拶を交わした。康介が口を切った。

「内観さん、話の内容、大体理解したと考えていいですか？」

るっす調が戻っていた。

「はい。最後にひとつだけ、祐子を助け出したときに、どのように引き渡してもらえるのかということですが？」

「そうっすね、えーと、ブリクロンさん、どうすることになってるっすか？」

鹿島が、肌が浅黒く目がギョロット大きくて、髭のある背丈の大きな外人に聞いた。

「それは、簡単。空港に、お連れします。日本行きの便の席、1席確保します。それから彼女のパスポート、インドへ持って行って」

「もちろん、それはそのつもりです。僕はあさっての便でカルカッタに向かいます。先ほど見せていただいたリストからもカルカッタの可能性が一番高いことが分ります。もう一箇所のムンバイはかなり離れていますね。同時にやるとしたら、どう対応するんですか？」

ブリクロンが言った。

「もしムンバイに彼女、いることも考えておく必要、あります。誰か引き受ける人必要。あなた以外の人。もう一人」

康介が会話に入った。

「俺、行ってもいいっすよ。会社を休んじゃうっす」

「鹿島さんにそこまでして頂くわけには・・・・・・・・」

「昨日も言ったっしょう、俺はこのことに掛けているんす」

賢はどうしても腑に落ちないとでもいうかのように、執拗に康介に対して急変の理由を糾した。康介は仕方なさそうに話し始めた。

「夢っすよ。崎野さんが失踪してから、毎日同じ夢を見たんす。変な夢なんす。自分が登場するんす。俺はその自分を見ているんす。聖職者みたいな白いベールを被った、偉そうなおっさんが3人出て来て、登場している自分を説得するんす。「お前は、このときを生きる為に生まれて来た。思い出しなさい」って言うっすよ。「この上ないお方をお救いする為に、是非同じ場に誕生させて欲しい」と言ったではないか」って言うっす。登場している自分が、「崎野さんのことですか？」って訊いたんす。そしたら、「そうだ。それが分かっていたら、直ぐに実行しなさい」って言うっす。俺も、初めはたかが夢と思ってたんすが、毎日、全く同じ夢を見て、それを朝起きた後でも覚えているんで、気持ち悪くなってきたんす。その内、俺は崎野さんを助けなければ生きていてもしょうがないっつうか、そうしないとられないっつうか、賢さんがいつも言う、意識って奴かも知れないけど、そんな気になって、居ても立つ

でもいられなくなったんす。それで、サツのダチに協力頼んだんす。それからいろいろ調べて、やっと、なにをどうするのが一番早いか分かって来たんす。このふたりは警察も保証している確かな人たちなんす。彼らも命を掛けてるんすよ。こんな危ない橋は、よほどの決意が無けりゃ渡れません」

賢は、自分が祐子のことを見くびっていたのではないかと、身が引き締まる思いがしてきた。居なくなって、なおこれほどまで大きな影響力を表わす祐子の正体は自分の考えているような、小さな存在じゃないのかもしれないと思った。

賢と康介、二人の外人の4人で取り決め事項を話し合った。祐子がカルカッタに幽閉されていたときは、救出が成功した段階で賢が引き取り、ムンバイにいた場合は、鹿島が引き取ることになった。それから4人は金の受け渡しの話をした。最初の100万円は賢が出発当日に空港でブリクロンに手渡しすることになった。残りは無事祐子が帰った場合、翌日に95%指定口座に振り込む。爆破が成功しても、祐子が見つからなかった場合にも翌日に、ただし金額は半分の45%を振り込む。この計画が失敗した場合は賢の帰国後に手数料としてあと10パーセントをブリクロンに手渡しすることになった。禁止事項に附いては瑕疵を含め、双方から厳しく制裁措置をとることとした。その制裁措置は、命の保障をしないという内容だった。A4の用紙2枚に日本語でその契約内容を書き込んで、賢とブリクロンがサインをした。その契約が法律的には、何の効力も有していないことを賢はよく分かっていた。契約が成立すると、賢は金の調達のために直ぐに行動に移りたいと言って、梓を伴ってそこを出た。あれだけのタンカを切ったのだが、金を工面する宛ては無かった。2千万円を2日で用意することは、今の賢には至難の業だった。しかし、藤代には頼りたくなかった。だからと言って危険なことの為に親を頼ることはできないと思った。浮かない顔で品川駅に向かう賢に田辺が声を掛けた。

「リーダー、そのお金、わたくしがお貸しします。その代わりに、わたくしもインドに同行させてください」

「君は、我々がやろうとしていること、分かっているんですか？君にそんな負担を掛ける訳にはいかない……」

「わたくしはリーダーの女房役ですよ。リーダーのされることは全てサポートさせていただきます。できることはさせてください。本当は、何をなさろうとしているのか、まだはっきり分かりませんが……」

「法律的には認められていないことをやろうっていうんですよ。それにしても、君が丹精して貯金してきたお金を借りるのは気が引けるな」
ふたりは人目を避ける為に、一旦梓のアパートに立ち寄った。そこで賢は梓に計画の詳細を説明した。梓は黙って聞いていたが、リスクの回避策を考えておく必要があると言った。

「先ず、実行者達には、絶対にリーダーや鹿島さんの存在が分からないようにしなくてははいけません。事後、どんなことが起きてくるか分かりませんから。スタートしたら、あくまで、実行は自己完結で最後までやり抜く。その点は釘を刺しておいた方がいいと思います。それから、後は失敗したときのリカバリーをどうするかです。あらゆるケースに附いて対応策を考えておく必要があります。わたくしが全てのケースをリストアップして、考えられる案を列挙します。どこまでできるか分かりませんが、今日、それを纏めます。明日には先ほどの3人に連絡して、理解させておいた方がいいと思います。例えば、爆発物が事前発覚してしまった時はどうするかとか、その爆発で誰かが負傷した場合はどうするかとか、突撃グループが相手の用心棒グループに負けた場合はどうするかとか、藤代祐子さんが居なかった場合はどうするかとか、項目はかなりの数になると思います。本来はそれを全てのケースについてAHPなどの手法で、最適解を検討した方がいいのですが、時間がありませんから、直感で判断してでも選択肢を決めておいた方がいいと思います」

「そうですね。AHPのことは良く知らないけど、あまりに論理的に処理しようとし過ぎると、矛盾が発生したときには対応できなくなるんじゃないですか？」

「ええ、それは考えられますが、直感の行動の背後に論理的な裏づけを貼り付けておけば、少なくとも、ある程度不安を排除できると思います。

リーダーじゃありませんが、成功の為には不安要素を可能な限り減らすべきだと思います」

「そう、僕には必要無いと思うけど、今回は複数の人が関与するからね。それは必要なことだな。梓、大変だけど頼むよ」

「はい、リーダー。今度のプロジェクトの目標達成の為にも、この計画の成功は、絶対必要なことだと思います。障害となるものをどのようにクリアしてゆくかという事例になるとと思います」

ふたりは一旦会社に戻ることにした。梓が途中で駅前の銀行に寄った。定期預金の解約の手続きをし、普通預金に移して、100万円を引き出した。2千万円は、つい先月定期積み立ての満期を向かえた積み立て預金やいくつかの通帳を纏めて、ひとつの定期預金に切り替え、やっとまとまった金額にしたばかりだった。窓口で理由をあれこれ聞かれたが、梓はニコニコ笑っているだけだった。梓は考えた。「この人の為に、自分の全てを賭けてしまいそうだ。いいのだろうか？」その自問に、自答できないまま会社のエントランスを賢の後に附いて入って行った。2日後にインドに調査の為に出張するという申請は、藤代にとってはひとつの安心材料だった。藤代は賢が事務所に居る間は、社長室の自分のデスクも溶岩のガレに座っているような居心地の悪さだった。賢が暫らくの間事務所から姿を消すことは、苦しい気持ちから開放されることを意味していた。直ぐに承認が降りた。

「どのくらいの期間になるのかね？」

「おそらく、2週間以上になると思います。チケットはオープンにしようと思っています。それから、申請書に記載させていただいておりますが、田辺を同行させようと考えています。あと、個人的な内容になりますが、亜希子さんも一緒にお連れしようと考えております」

「亜希子のことは、暫らくは君に任せるしかない。危険な目に遭わせないようにしてくれ。いいね」

「はい。それは、肝に銘じております。それでは、明後日からインドに行かせていただきます。わたくしが留守の間は、前回同様、楠木に代行を務めさせるつもりです」

「分った」

祐子が大笑いをしていると、先ほど祐子を叱った女が二人の男を連れて入って来た。去勢された宦官的存在の男が居ることを祐子はここに連れて来られたときに、叱った女から聞かされていた。祐子はドアの影に身を避けた。二人の宦官は一番奥まで入ってゆくと、右奥の2段ベッドの下段に横になっていた女の手を掴んで外に引き出した。東洋人だった。顔は丸顔で、顎が少し引っ込んだ、黒い瞳の女性だ。年齢は30歳になるかといったところで、少し陰気な印象を与える。この部屋の中では最年長に見えた。一瞬全員がベッドの奥に顔を隠し、壁に体を向けてしまった。祐子は意識をその場に戻し、事の成り行きを傍観した。女は二人の男に両手、両足を縛り上げられ、宦官の肩に担がれた。身を振って暴れようとしていたが、それが精一杯の抵抗だった。悲鳴を上げている。祐子には何事が起こるのか解らなかった。男たちと祐子を叱った女が東洋の女を連れて出て行くと、先ほど英語で話し掛けて来た女が言った。

「She'll be sold to the women's mansion. She's already become unnecessary for him. She'll be pushed down into a miserable world. (彼女は女の館に売られてゆくのだよ。彼女はもう彼には要らなくなったのだよ。酷い世界に突き落とされるのだよ。)

祐子は、許されてなるものかと思った。涙が浮かんで来た。東洋人の女の悲しそうな顔が眼に浮かんだ。通で男を呼び込んでいる姿が眼前に展開してきた。男たちに、鬼畜のごとく扱われ、残飯のような食事をががつ食べている姿が見えてきた。祐子はいきなりドアを開けて外に飛び出すと、宦官たちの後を追った。一行が開かずの扉のうちの1番奥の扉のところまで来て、叱った女が当(まさ)に扉のノブに手を掛けて開けようとした時、祐子は女と宦官の間に入って両手を広げた。祐子の目には涙が溢れている。祐子は日本語で叫んだ。

「お願い、助けてあげて、お願いだから。わたしを代わりに連れて行って。わたしはどうなってもいいから、この人は助けてあげて。この方がまだましだから」

女が言った

「Zip up your lip! Go back to your room immediately.」(黙りなさい！ 直ぐに部屋に戻りなさい)

「Help her! Help her! Help . . . her! . . . Please sell me to the women's mansion instead!」(彼女をたすけてあげて！彼女を助けてあげて！彼女をたすけてあげて！代わりにわたくしを娼婦の館に売って下さい。)

祐子は叱った女に泣いて縋った。叱った女が祐子を足で蹴り倒した。祐子は再び叱った女に縋った。叱った女が再び祐子を払い倒そうとした時、もうひとつの開かずの扉が開いた。そこからハーレムの男が出て来た。祐子が泣き喚いている光景を目の当たりにすると、男はいきなり祐子の近くに来て、祐子の顔を足蹴にした。祐子は左頬から床の上に倒れた。唇が切れ、血が滴り落ちた。祐子は朦朧とした状態で、起き上がると、今度は男の脚にすがり付いて泣きながら叫んだ。

「Help her! Please sell me instead of her!」

祐子はそう言うとその場にバタンと倒れ込んだ。気を失っていた。意識を取り戻した時、祐子は鉄格子の檻の中に入れられていた。衣服は祐子が九州で連れ去られたときのスーツとスカートに着せ替えられている。同じ檻の中の奥の方にまだ二十歳（はたち）前の娘3人が蹲っている。祐子は自分が動物になったような気がしてきた。ブタになったような感覚を抱くと、急にリアリティを感じ出した。隅に蹲っている3人の少女が自分が産んだ子豚に思えてきた。祐子は仔豚たちの近くに行くと一人の少女の頭を優しく抱えて囁いた。

「いい、生きるのよ。明るく生きるのよ。自分のことを惨めと思っちゃだめよ。今が底よ。明日は必ず良くなるわ。いいわね」

その娘は祐子に抱き締められながら頷いた。祐子は他の二人の娘にも同じように優しく話し掛けた。3人とも祐子の話に頷いたが、目には一杯涙を貯めている。祐子は一人一人に語りかけた後、3人に向かって言った。

「歌を教えてあげる。歌うのよ。踊りも教えてあげるわね。踊るのよ。

この世界は歌って、踊る為にあるのよ。何をしても捕らわれちゃ駄目よ。どんなことをさせられても、逃げちゃ駄目よ。受け入れなさい。今が、一番生きているのよ。何も考えないで、命を迸らせなさい。いい、歌うわよ。日本の歌よ。……さくら さくら やよいの そらは みわたす かぎり かすみか くもか においぞ いずる いざや いざや みにゆかん」

辺りに響き渡る美しい声だった。3人の娘たちは泣くのを止めた。その歌声に我を忘れて聞き惚れた。

「いい、もう一度歌うわよ。……さくら さくら ……………」
祐子は一小節ずつ歌っては、それを3人に復唱させようとした。3人は初めは下を向いていたが、祐子が一人一人の近くに寄って歌って見せたので、少しずつ復唱し始めた。時間の経過も分らなかったが、祐子が気が付くと、檻の鉄格子の外に黒山の人ばかりができていた。檻の前には金属の器に入れられた雑炊が4つ置かれている。確かに黄色い色をした雑炊のようだった。一瞬祐子は自分たちがブタの親子だったことを思い出した。祐子は鼻で「ヴゥヴゥ」と音を出した。すると3人の娘たちも真似をして「ヴゥヴゥ」とやった。祐子は檻から手を出して、金属の食器をひとつ掴むとそれを一番端の娘に渡した。娘はそれを受け取って檻の床の上の自分の前に置いた。祐子は他の二つも同じように二人に渡した。二人とも初めの娘と同じようにした。最後に祐子は自分の分を取って、器の端を掴むと3人の器の縁に当てるようにして、粥を3人の器に分け与えた。祐子の分は底の方にほんの少しだけ残っている。祐子が3人に向かい合って、器を前にして両手を合わせ瞑目すると、3人とも両手を合わせた。祐子が目を開いて「いただきます」と言って左手を食器の中に入れて僅かな粥を掬って口にすると、3人も同じようにしたが、一口食べると、3人はががつと一気に食べてしまった。3人が食べ終わるのを待って、祐子は両手を合わせて瞑目し、黙礼した。3人も同じように黙礼した。祐子は可笑しくなってきた。

「わっはっはっはっはっはっはっはっはっは……さあ、さくらを歌うわよ。いい？ さくら さくら やよいの そらは みわたす かぎ

り・・・・・・・・・・・・・・・・」

3人も声を合わせて合唱した。見物していた者達が拍手をした。やがて黒山の人を掻き分けて、小柄で髪の毛の縮れた猿使いのような男が1メートル立方ほどの大きさの木の台を、若い二人の男に指示して運び込んできた。祐子は、いよいよ売られるときが来たと感じて、3人の娘に向かって言った。

「何があっても、希望を捨てちゃ駄目よ。明るく生きるのよ。今を生き抜くのよ」

3人は祐子をじっと見つめていたが、黙って頷いた。祐子はそれから思考を止め、心を空しくした。

競りが始まった。祐子はさくらを歌い始めた。楽しくなって来た。人身売買の競りを見たのは初めてだった。興味津々になってきた。最初は3人の娘の一番手前にいる背丈の小さな丸顔の娘だった。祐子は手を振って送り出した。祐子はさくらを歌い続けた。娘はおろおろせず、涙も見せなかった。黒山の人ばかりの中から声が掛かる。5人目で競り落された。2人目の娘は少し目鼻立ちが良かった。7人目で競り落とされた。3人目の娘は鼻の低い目の小さな娘だった4人目で行く先が決まった。いよいよ祐子の番になった。祐子はスタイルも、顔も、誰が見てもずば抜けていた。競りの壇上に立つと、祐子は自分がそこにいることが可笑しくなった。「ブタと人間と同じように競りをするのかしら」という思いが湧いてきた。捨てたはずの思考が湧き上がってきた。「競りのときブタはヴウヴウと鳴くのかしら、いいえ、悲しくなってヴィーヴィーって泣くのよ」そんな思いが湧いてくると急に悲しくなった。祐子は思い切り泣いた。

「わーん わーん わーん・・・・・・・・」祐子の鳴き声があまりにも大きかったので、暫らく競りが中断された。それから、祐子は自分もブタと同じように四つんばいになろうと思った。祐子は壇上で四つんばいになると、「ヴィーヴィーヴィー」と悲しげに鳴いた。10秒ほど鳴き続けてから、今度は立ち上がった。祐子はいきなり大声で笑い始めた。

「わっはっはっはっはっはっは・・・・・・・・」

スを掛けさせられた。その時、烈しい爆破の音が聞こえた。男に手を引かれてその建物から出ると、人々が道路を一斉に走って行くのが感じられた。人々は何か大声で叫びながら走って行っているようだ。

祐子は直ぐに車に乗せられた。サングラスの隅から、人々や牛、ロバなどが渾然としている道路を、警笛を鳴らしながら車が走っているのが分かる。どこを通っているのか、どこに向かっているのか皆目見当が付かなかった。でこぼこ道を暫らく走ってから、小さな建物のある草原のように感じられる場所で車から降ろされ、飛行機に乗せられた。小型の飛行機だということは直ぐに分った。時々酷く揺れた。祐子は疲れていた。空腹感を通り越して、憔悴してきていると感じた。何時しか眠りに落ちた。……祐子は体を揺すられて目を覚ました。飛行機から降りる時の会話で、祐子のほかに2人の女が乗せられているようだ分った。祐子は仲間が出来たと思いき嬉しくなった。飛行機から降ろされると、サングラスをしたまま車に乗せられた。暫らく走ると祐子はサングラスを外された。やはり車には祐子のほかに2人の女性が乗っていた。いずれも若い東洋人の女性で、それなりに特徴のある顔立ちだった。車はジープだった。祐子は髪の毛の縮れたキューイフルーツのような顔をした黒人の男と並んで2列目の席、他の二人の女性は3列目の席に座らされていた。運転しているのは茄子を逆さにしたような、頭のすっかり禿げた黒人で、助手席の男は背の高そうな体の大きな白人だった。3人ともサファリーウェアを身に付け腰に拳銃を下げている。灌木以外には何もない荒地を走り続けた。途中で隣のキューイ男がザックの中からパンを3切れと紙パックのオレンジジュースを出して、祐子と二人の女性に渡した。祐子はパンを貪るように食べ、ジュースを飲んだ。二人の女性はそれを唯受け取っただけで、手に持ったままボーっとしている。隣の男の頭の形がキューイフルーツで、運転をしている男の頭が逆さ茄子で、よく見ると白人はアボガドの実に似ていた。ここは砂漠地帯で、植物が少ない。人間は野菜・果物を求めて、顔も果実に似て来るのかと思いき、また急に可笑しさが込み上げてきた。祐子はいきなり笑い出した。

「わっはっはっはっはっはっは、わっはっはっは・・・」

3人の男たちは、ぎょっとして、祐子を睨み付けた。二人の女性は驚いて、うたた寝しているところを急に起こされてもしたような顔をした。暫らく走り続けると周囲が次第に暗くなってきた。車のエンジン音と、でこぼこ道で揺れるときの金属同士がぶつかるガタガタという音が響いている。後部座席の二人の女性は体を寄せ合って身を縮める様になっている。運転している男が何か言って車を止めた。3人の男たちが皆、外に出た。エンジン音だけになって、周囲の静寂が妙に不気味な感じに思えて来た。遠くに獣のほえる声が聞こえる。祐子は背筋が冷たくなるような感触を覚えた。男たちは小用の為に車を止めたということが分った。直ぐに戻ってくると、アボガド男が言った。

「Piss! Get off! Hurry on!」(小便しろ、降りろ、早くしろ)

祐子是用足しをさせようとしていると理解した。祐子が降りてシートを倒してやると、後部座席の二人の女性も降りて来た。アボガド男は先頭に立って、ヘッドライトの明かりの当たる道路わきまで行った。3人の女性は後に附いて行った。遠くで獣の遠吠えが聞こえる。祐子は身震いした。恐ろしさは無かったが、体が自然に震えた。アボガド男が言った。

「Here, Go!」(ここだ、しろ!)

二人の女性は、おどおどしていたが、祐子はいきなりワンピースのすそを捲り上げると、下着を下ろししゃがみこんだ。二人の女性も祐子の姿をみてそれを真似た。3人が用を足すと、アボガドはそのまま車まで3人の女性を誘導した。逆さ茄子とキューイフルーツは車の前で待っていた。彼ら是一言も言葉を発さなかった。ただ、言われた仕事を淡々とこなしているように見えた。祐子は、「この男たちは誘拐犯たちと違い、最低限の礼儀をわきまえている」と思った。祐子達が車に乗り込むと、逆さ茄子は再び無言で車をスタートさせた。祐子はほっとしたが、ここで覚悟を決めようと思った。意識を外し、自分を客観視することにした。もう外は暗闇で車のヘッドライトが無ければ漆黒の闇であった。それからかれこれ2時間は走ったかと思われるが、前方に明かりが見えてきた。道路もでこぼこの度合いが少なくなってきた。あまり明かりは点い

ていないが、窓の外をよく観ると道路の両サイドには建物が立ち並んでいた。車は窓から光の漏れている3階建てと思われる建物の前に停まった。白人の男が言った。

「Get off!」(おりろ)

男たちに促されて車から降りると、周りにある建物の窓と思われるところに明かりが灯っているのが分った。とは言え、全体が闇に包まれていることに変わりは無かった。これから向かう場所が更に深い闇であることに疑う余地は無い。祐子は「どれだけ明るいか、ひとつ観察してやろうではないか」と思って周りを見廻した。男たちに附いてビルの中に入ったが、中は吹き抜けの天井になっていて、電球が4つ付いたシャンデリアが釣り下がっていた。照明は全体的に薄暗かったが、陰湿な雰囲気ではなかった。そこはホテルのロビーのようであった。窓の隅にソファが置いてあり、インドのオークションで祐子を落札した婦人が座っていた。男たちは3人の女性を連れて婦人の近くに行った。婦人は男たちに向って軽く頷いてから立ち上がり、一人の女性に向かって語り掛けた。その女性は祐子より背が低く、茶髪だった。年齢は20歳そこそこに見える。鼻はあまり高くないが、口元がこじんまりまとまっていて、唇が少し厚い。下膨れの、小麦色をした肌の東洋人だった。薄暗い中でも祐子にはそれがはっきりと確認できた。婦人が話し掛けたのはどうやらタイかマレーシアの言葉のようである。意味は分らないが祐子はこの言葉を聞いた記憶があった。娘は下を向いて小さく頷いた。次に婦人はもう一人の娘に話し掛けた。東洋人にしてはやや色の白い、背丈も祐子とさほど変わらない22歳前後に見える黒髪の女性だった。目が大きくクリッとしていて、鼻筋が通っているが口は少し大きめの女性だ。婦人が話しているのが中国語であることは直ぐに分った。この女性は夫人の方に顔を向けていたが、視線は遙か彼方に据えられているように祐子には感じられた。女性は婦人の言葉にほんの少し顎を引いて頷いたように見えた。二人の女性は茄子とアボガドに連れられてエレベータの方に向かって歩いて行った。四人がエレベータに消えると、婦人は立っている祐子の傍に来て日本語で話しかけた。祐子は意識をこの場に戻した。「この夫

人は一体、何ヶ国語を話すのかな？」と思った。

「あなた、崎野祐子ね？間違いないね？」